

# 京都府埋蔵文化財情報

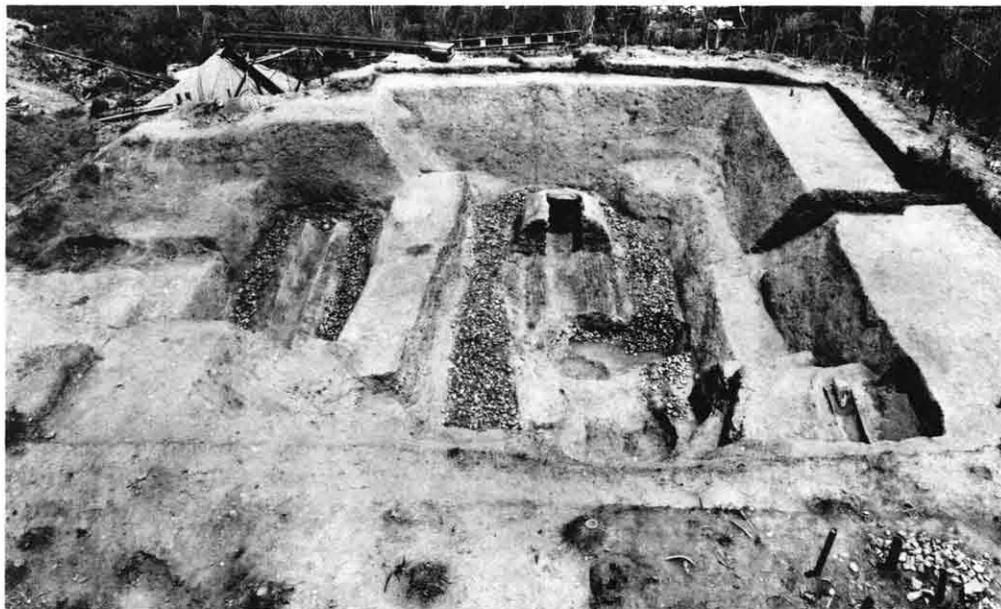
## 第 33 号

八幡市ヒル塚古墳の発掘調査	中井 英策	1
ヌクモ古墳群の発掘調査	竹原 一彦	7
長岡京跡右京第 310 次の発掘調査	石尾 政信・土橋 誠	13
集落遺跡に伴う不整円形土坑群	奥村清一郎	23
—平成元年度発掘調査略報—		30
1. 川 向 1 号 墳	2. 西 山 館 跡	
資料紹介 温江遺跡検出の土坑	森 正	33
—丹後地域弥生時代後期における貯蔵形態の一例—		
福知山市興遺跡出土の簪について	田代 弘	39
—弥生時代簪の一事例—		
私市円山古墳出土の円筒埴輪	鍋田 勇	43
新刊紹介 福知山高校資料室収蔵品目録—考古資料編—		47
府下遺跡紹介 44. 天智天皇山科陵		49
長岡京跡調査だより		53
センターの動向		57
受贈図書一覧		59

1989年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版第1 八幡市ヒル塚古墳の発掘調査



(1) 墳頂部全景 (南西から)



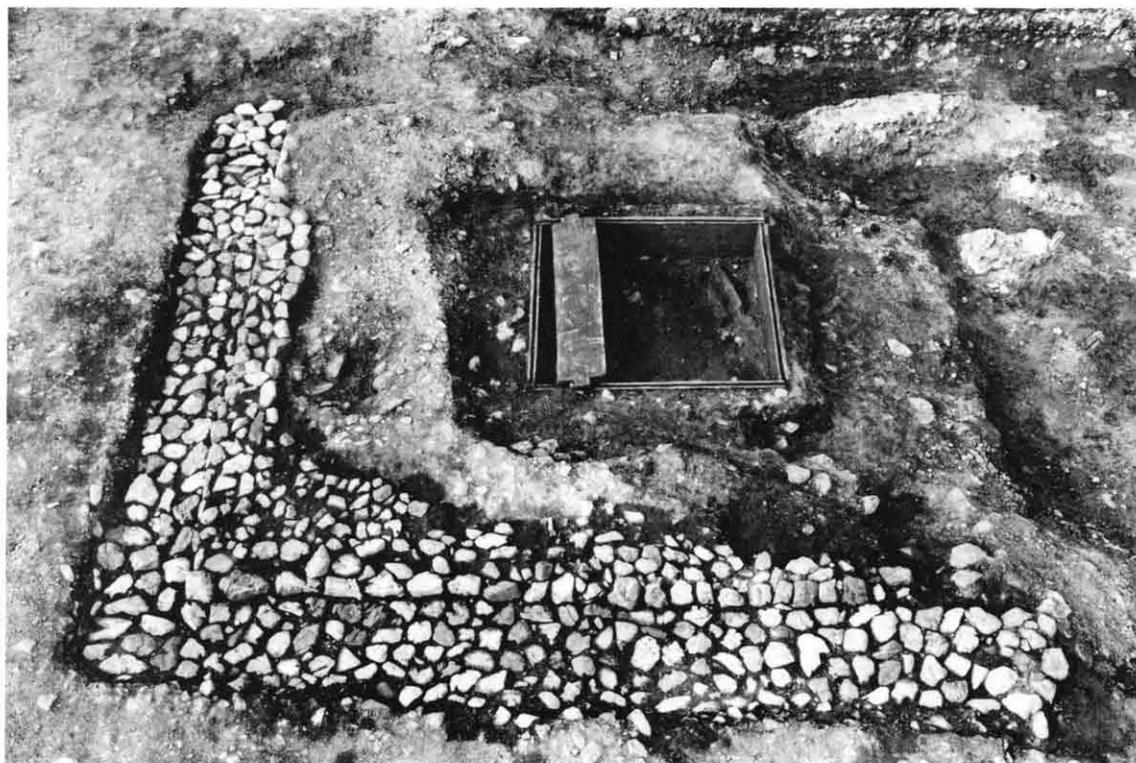
(2) 第1主体部粘土槨



(1) ヌクモ2号墳出土龍虎鏡



(2) ヌクモ2号墳埋葬主体部（北から）



(1) 井戸(S E 31035)検出状況



(2) 檜 扇

# 八幡市ヒル塚古墳の発掘調査

中井英策

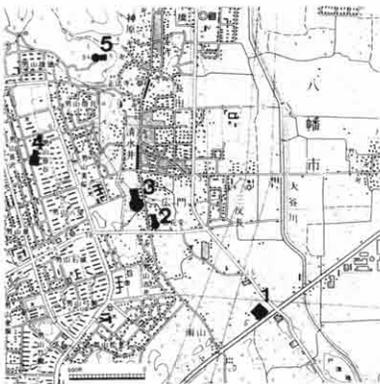
## 1. はじめに

ヒル塚古墳は、八幡市美濃山ヒル塚に所在する。周囲には、茶臼山古墳、西車塚古墳、東車塚古墳などの古墳が築かれている。今回の調査は、周辺の開発に伴い、古墳の範囲・埋葬施設の状況を確認するために、八幡市教育委員会が主体となって、平成元年1月から6月まで行われたものである。

## 2. 外形

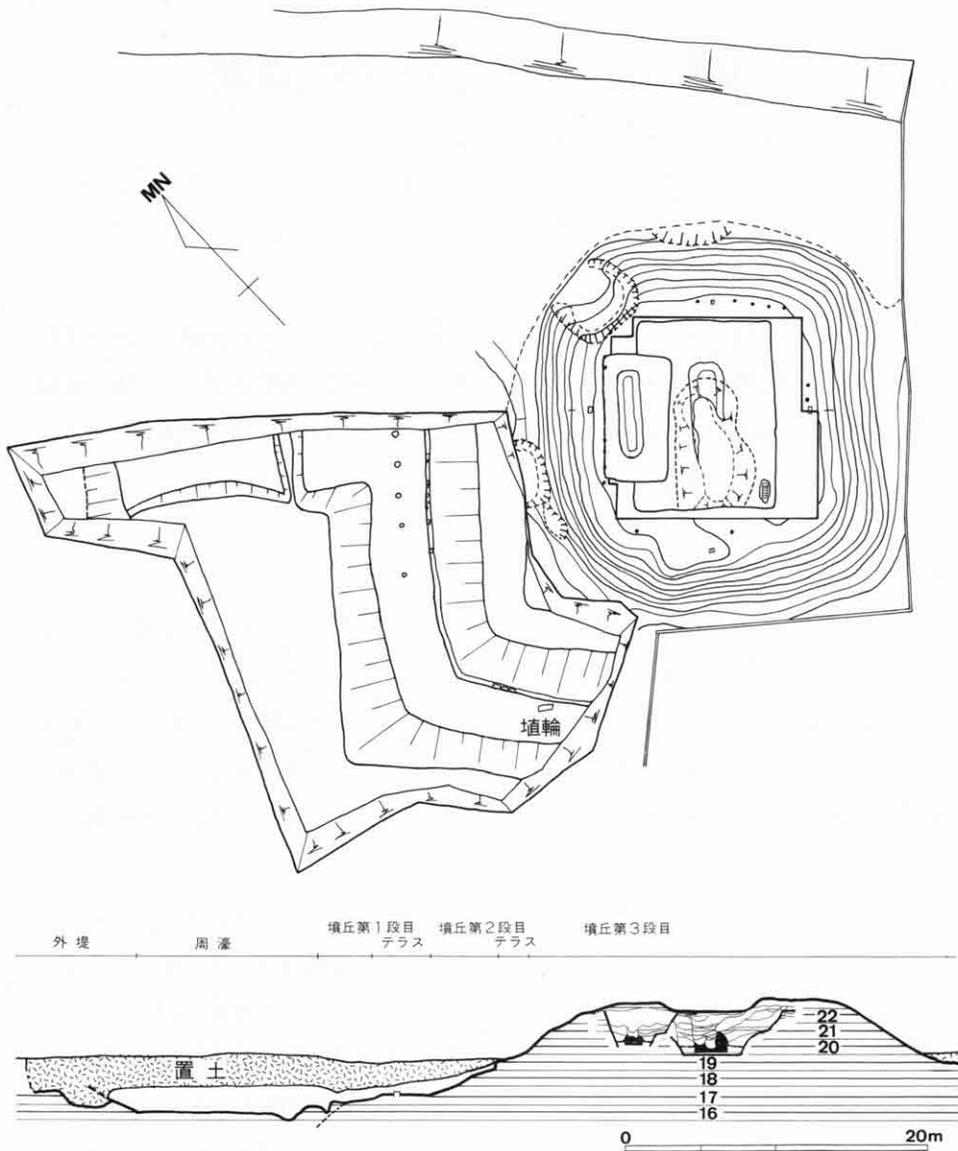
ヒル塚古墳は、男山丘陵の南端部、洞ヶ峠付近から京都側にのびる小さな尾根の先端に立地する方形墳である。墳丘は、対角線が方位と一致する(以下、北東を便宜上の北とする)。一辺52.4m、高さが約7.5mの三段築成の方墳状を呈し、埴輪列・葺石を有し周濠・外堤を巡らす。ただし、調査で確認できたのが墳丘の南西隅に限られるため、方墳と断定するに足る資料は得られていない。また、墳丘西辺の中央には外堤にのびる陸橋部を有する。

墳丘は、一段目テラス以下を地山の削りだし、二段目以上を盛り土によって構築していると思われる。埴輪列は、墳頂部と一段目テラスで検出した。墳頂部の埴輪列には、第二主体部の構築に伴う立て替えが見られる。葺石は、拳大から5cm大の円礫が大部分を占め、わずかに割り石が混入する程度であるが、原位置をとどめるものは調査区内ではほとんど認められなかった。二段目立ち上がり部に原位置をとどめる割り石の基底石がわずかに残存する。周濠は幅14m・深さ約50cm程であるが、全周にわたるものかは確認できなかった。陸橋部は、墳丘西辺中央に、一段目テラスにとりつく形で地山を削り残して造られ、最終的に溝を切り墳丘



第1図 位置図 (1/50,000)

1. ヒル塚古墳
2. 東車塚古墳
3. 西車塚古墳
4. 茶臼山古墳
5. 石不動古墳



第2図 ヒル塚古墳墳丘実測図

との切り離しを図っている。

### 3. 埋葬施設

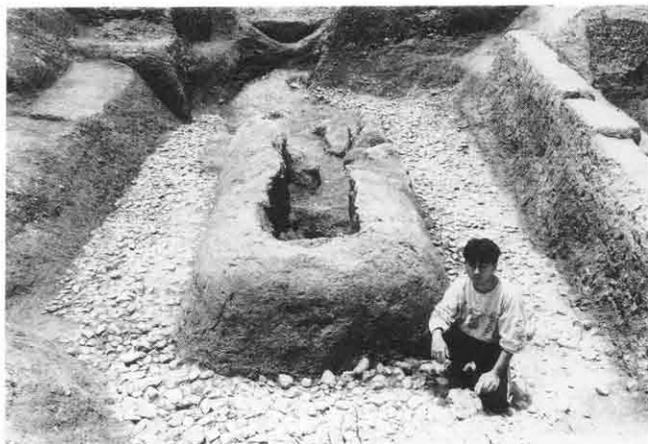
粘土槨2基、円筒埴輪棺1基を墳頂部トレンチで確認した。それぞれ第1主体部、第2主体部、第3主体部と呼称する。また、墳丘南側1段目テラス上に埴輪棺らしい、横倒しになった鱈付円筒埴輪を検出した。

**第1主体部** ヒル塚古墳の主たる埋葬施設である。中世以降に数度にわたる盗掘を受け南半分の粘土施設は破壊されていた。

墓壇は9m×12m・深さ3.5mで、上面より1.5mのところにてラスを両側に設ける二段墓壇である。このテラス上にピット状圧痕を6個検出した。礫床は、拳大の円礫を最大50cmの厚さで敷設する。礫床の上面には赤色顔料が認められる。棺床(粘土床)は、盗掘により南側1/2を失っている。この粘土床の上面には赤色顔料が厚く塗られている。棺の外側にある平坦面には槍・剣・刀等の鉄器類が置かれ、それらの柄は溝状の圧痕や漆の帯となった状態で検出された。棺は外径が80cm、長さが推定で7m強の割竹形木棺である。被覆粘土は盗掘により2/3を失う。棺床、被覆粘土ともにやや粗い青灰色のシルト質粘土を用いている。



第3図 墳頂部調査風景

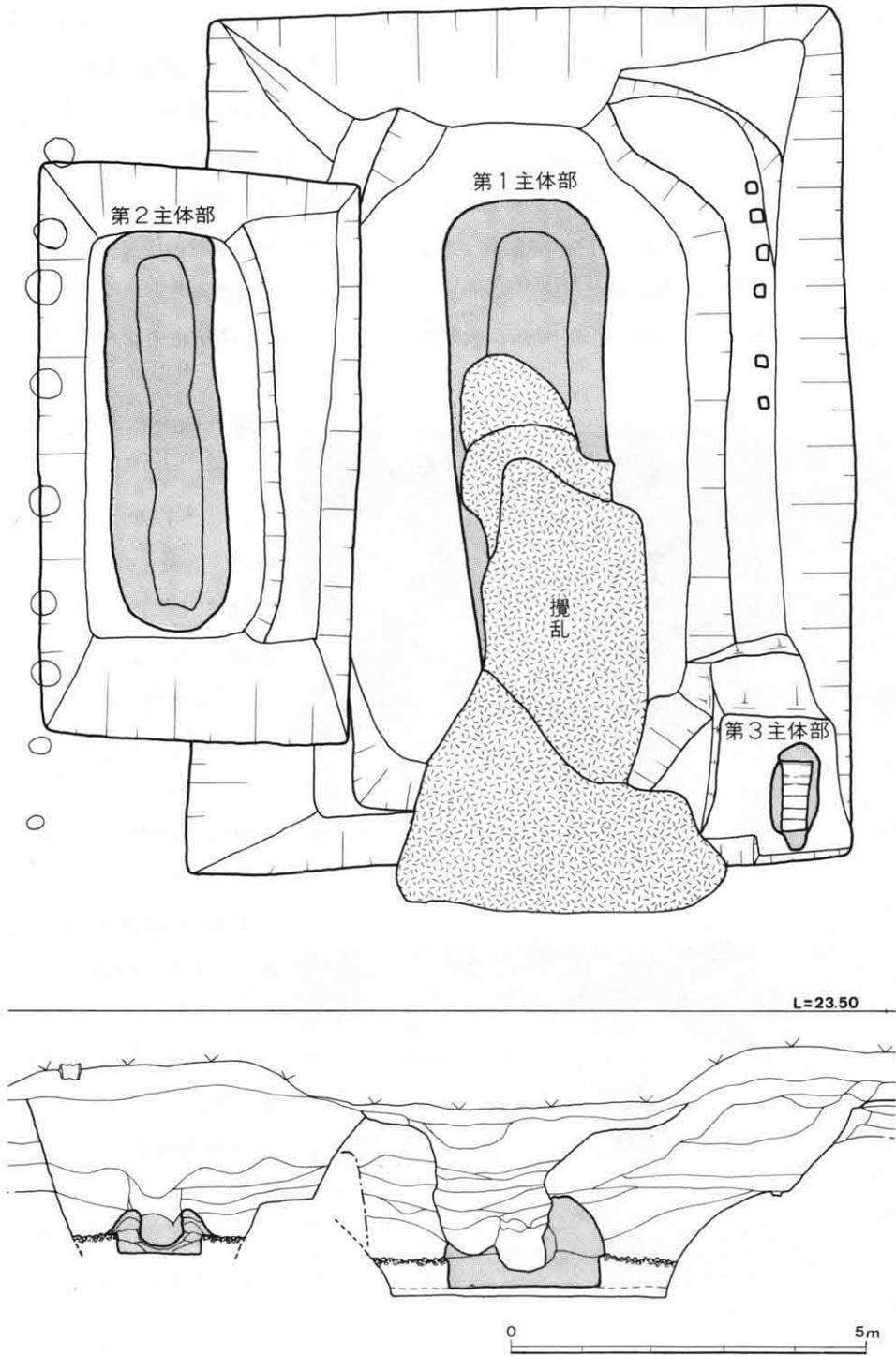


第4図 第1主体部調査状況

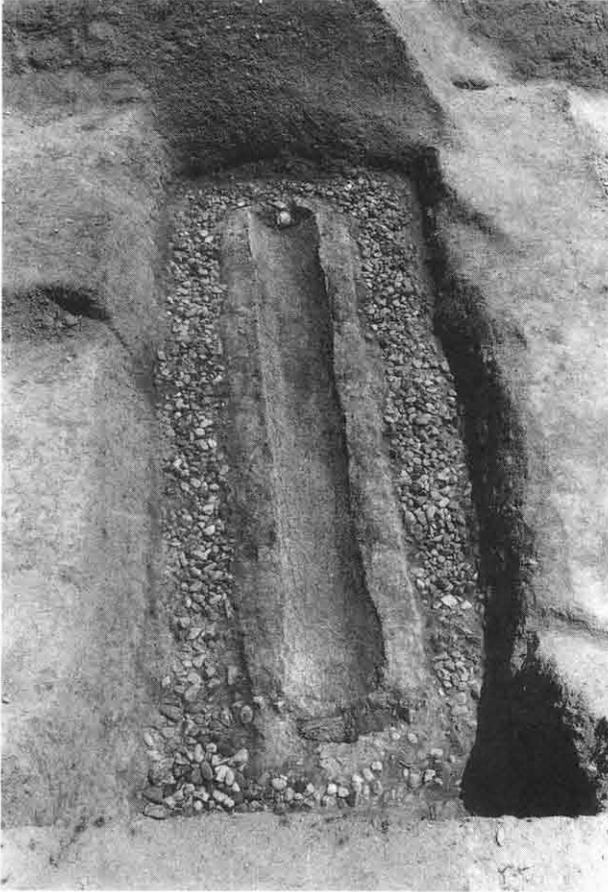
**第2主体部** 第2主体部は、第1主体部の東辺を切り込んで造られている。墓壇は、8m×4.5m・深さ2.5m以上を測る。東側の長辺のみにテラスを設ける。内部施設は第1主体部と同じ構造の粘土槨であるが、ひとまわり小さく、赤色顔料の散布箇所も大幅に省略されている。使用している粘土は精良な青灰白色粘土である。盗掘等の攪乱は受けておらず、棺外より鉄鏃・鉄剣・鉄刀・農耕具類・銅鏡が出土し、棺内から遺物は検出されなかった。

**第3主体部(円筒埴輪棺)**

円筒埴輪棺は主軸を第1主体部と同方向に持ち、口縁部を北にして第1主体部



第5図 主体部実測図



第6図 第2主体部

の南東部に埋置されていた。埴輪棺は上面を粘土で被覆する。この埴輪棺は第1主体部を埋め戻す過程で設けられた可能性が極めて高い。棺に使われている円筒埴輪は、高さ1m・口径40cm・底径30cmを測り、川西編年Ⅱ期に相当する。また、透かし穴を持たないことから棺に使用することを目的に作成したものと思われる。棺内から遺物は検出されなかった。

#### 4. 遺物

**第1主体部** 棺床上の棺外部に鉄槍50本・鉄刀6本・鉄剣・鉄鏃・鉄製工具類(針)が整然と並べられた状態で検出された。また攪乱土より鏡片

が検出された。

この鏡片は漆黒色を呈し非常に薄い。文様には細線式の獣様のもつと銘帯の部分があり、「節」と「人民」の文字が確認できる。型式については検討中であるが、画像鏡・



第7図 第2主体部遺物出土状況



第8図 第3主体部全景

細線式獸帯鏡・方格規矩鏡,それぞれの説がある。

第2主体部 頭側木口の棺外から方格規矩鏡1面,長剣・短剣1本ずつを検出した。棺外東側に鉄刀1本,両側には棺を囲むように15本の矢が1本ずつ並べられた状態で検出された。足側木口の棺外には短剣(槍の可能

性もある)が38本と,鉄製農工具類(鈍2・方形板工具刃先1・鉄斧4・直刃鎌2)が一括して置かれていた。

墳丘 墳頂部の西側埴輪列付近から須恵器の有蓋高杯数個体を採集した。

その他 盗掘坑より鉄片が多数と,銅製の飾り金具・土師器皿・北宋銭等が,墓壇埋土より弥生土器・石鏃・サヌカイト片が出土している。また,墳丘第1段目テラスには縄文土器・サヌカイト片の散布が認められる。

## 5. ま と め

ヒル塚古墳は,古墳時代中期中頃の方墳として広く知られていたが,今回の調査で全国でも最大級の粘土槨が検出され,その構造などから築造年代を4世紀末頃に求められる大方墳または前方後方墳であることが明らかになった。この時期,当地域には多彩な出土遺物で知られる前方後円墳の西車塚古墳が営まれており,ヒル塚古墳と西車塚古墳の両者を比較研究することが,古墳時代前期の山城地域の政治史の一端を解明する鍵になると思われる。

(なかい・えいさく=仏教大学学生)

# ヌクモ古墳群の発掘調査

竹原 一彦

## 1. はじめに

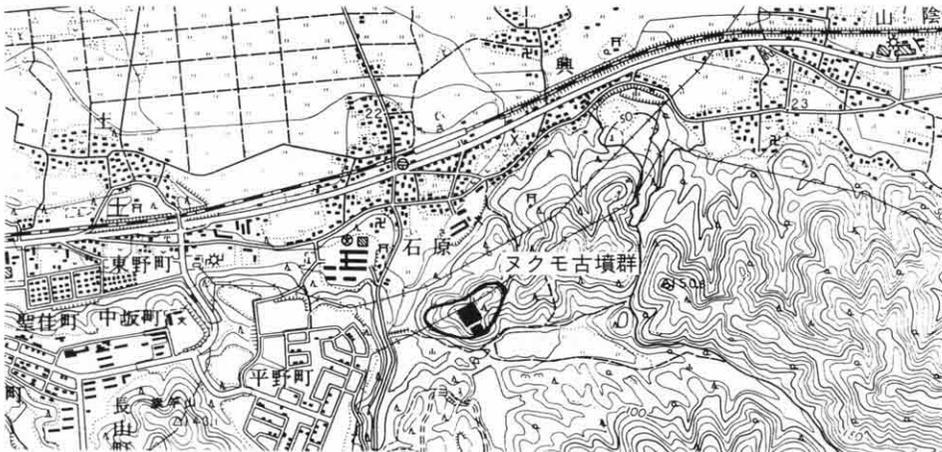
今回のヌクモ古墳群の発掘調査は、日本道路公団大阪建設局が実施している「近畿自動車道敦賀線建設事業」に係わるものであり、同建設局の依頼を受け行った。高速道福知山I・Cから舞鶴I・C間のルート上には、現在22か所の遺跡が存在し、その内の多くの遺跡は、由良川により形成された福知山盆地と周縁の丘陵部に存在する。ヌクモ古墳群は、京都府福知山市字石原に所在し、高速道のルート範囲内に丘陵の一部が含まれ、工事に先行して樹木伐採が行われたことから、新たに確認された古墳群である。

ヌクモ古墳群は、福知山I・Cの北方1km、石原集落背後の丘陵上(比高約90m)に位置し、10数基からなる古墳群である。今回、古墳群のうちルートにかかる1基(1号墳)が発掘調査の対象となった。

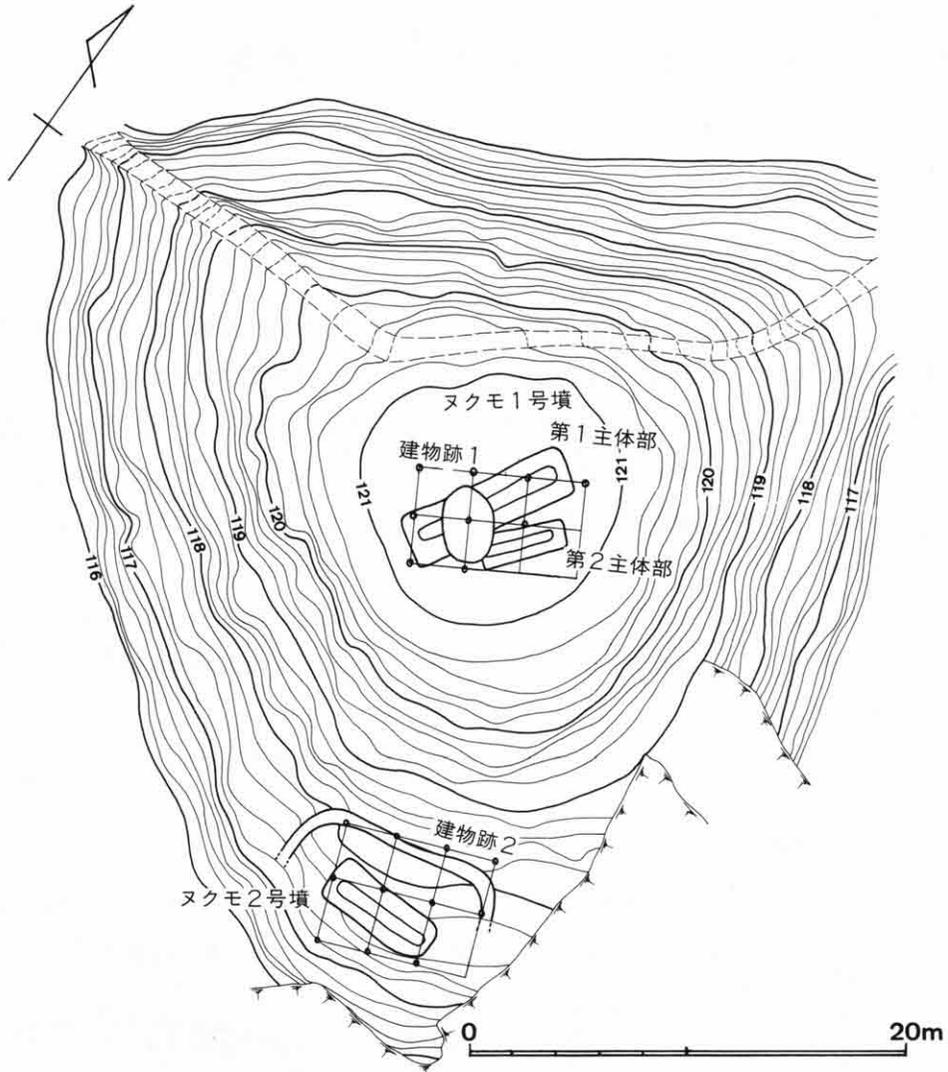
現地調査は、平成元年4月12日に開始し、同年6月13日に終了した。

## 2. 調査概要

当初、丘陵最高所に位置する1号墳(標高121m)が調査対象であったが、試掘調査の結果、1号墳の南側に新たに1基の古墳(2号墳)の存在を確認した。新たに発見した2号墳



第1図 位置図

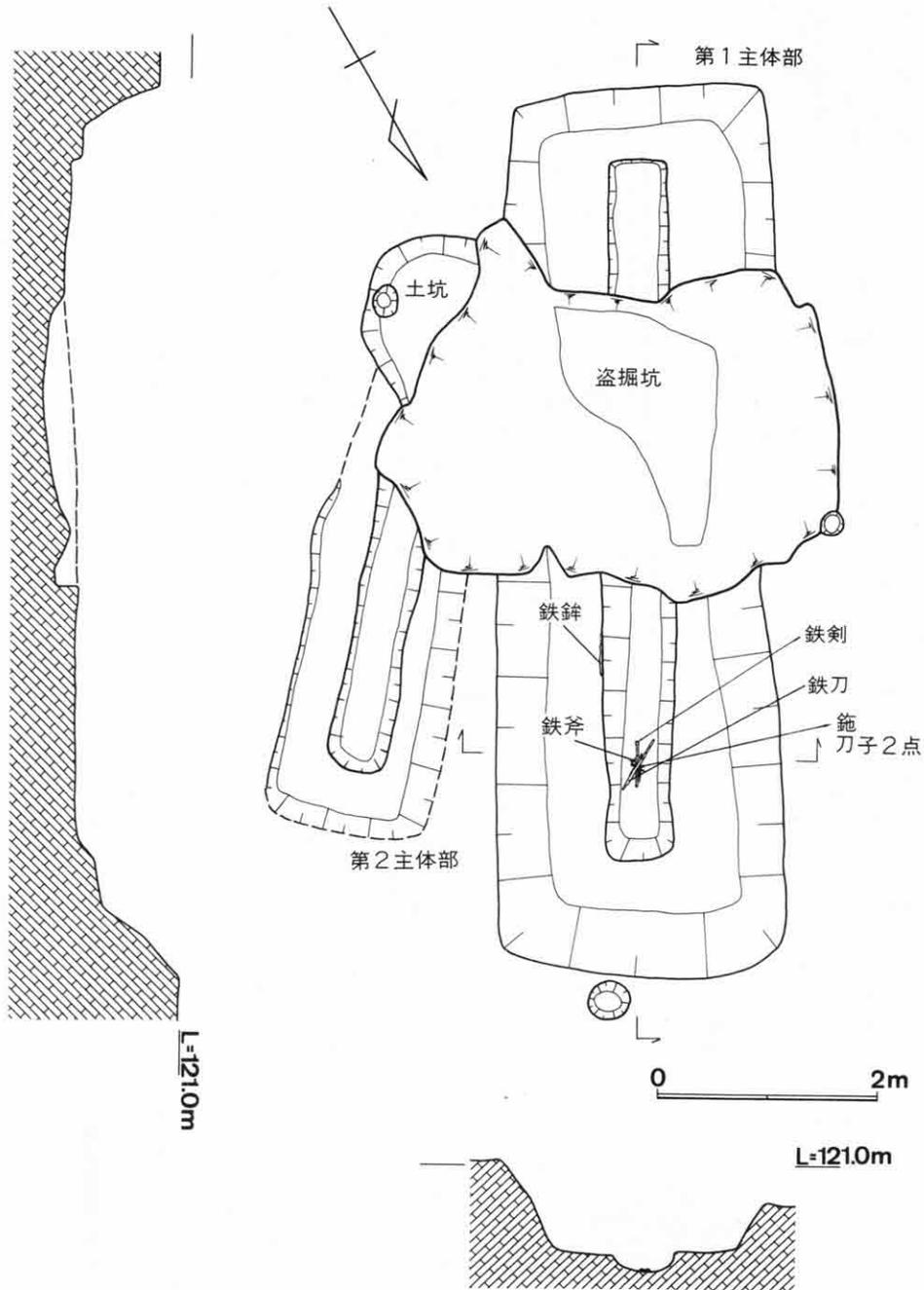


第2図 ヌクモ1・2号墳地形測量図

は、地形測量段階では1号墳の裾部に位置する小規模な平坦地であり、前面は急傾斜をもって下降する地形であったことから、当初は古墳と認識できなかった。

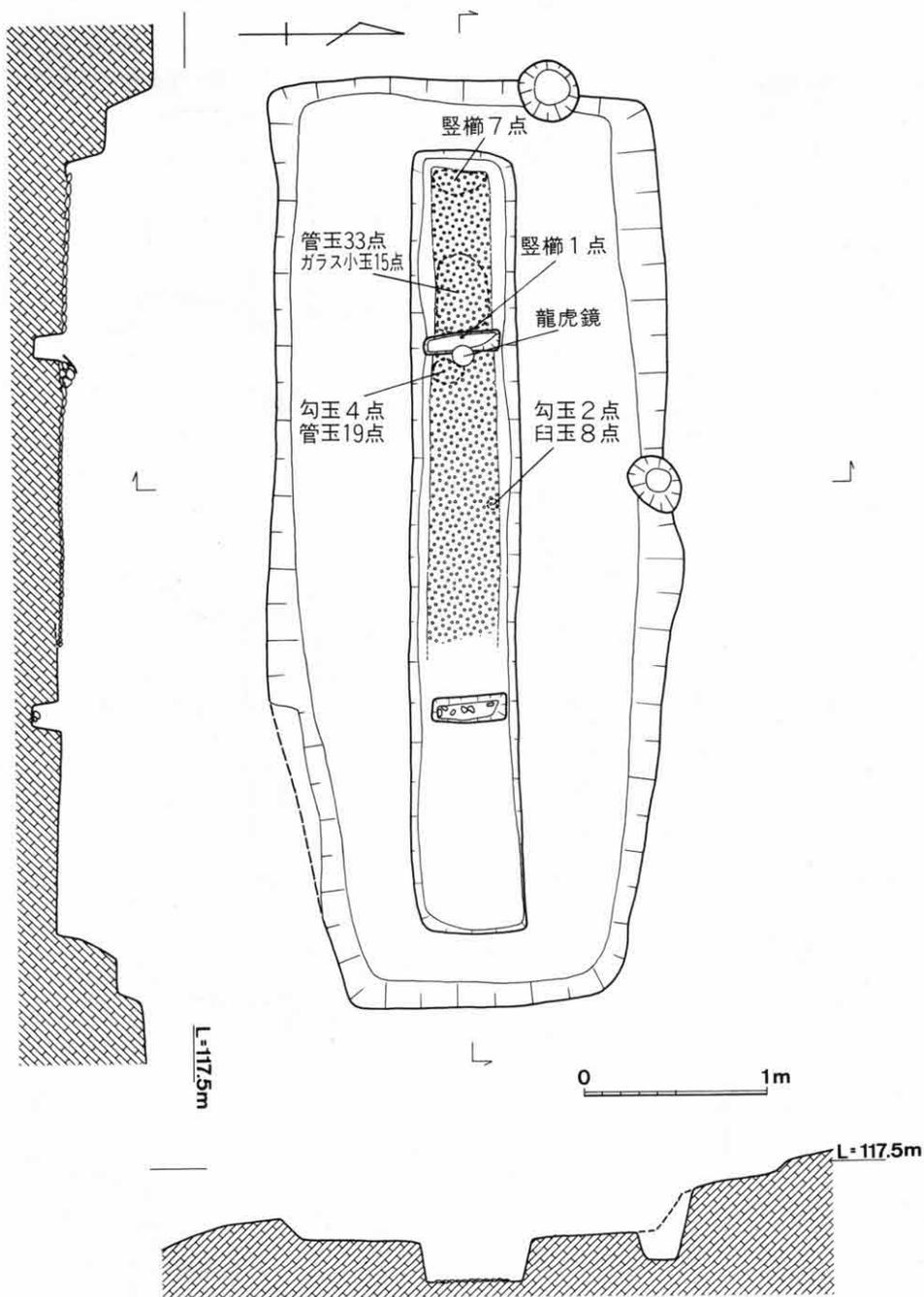
**ヌクモ1号墳** 丘陵最高所、尾根筋変換点の地形の膨らみを最大限に利用し、地山を方形に削り出すことにより、墳丘の整形を行っている。墳形はややいびつな長方形を呈し、一辺が約25m×30m・墳丘高3mの規模と推定される。墳頂部中央には大小2基の埋葬主体部(木棺直葬)が並んで存在したほか、中世の掘立柱建物跡1棟・土坑3基が存在した。

**第1主体部** 全長8.1m・幅2.5mの墓壇掘形をもち、2段に掘り下げている。2段目の掘形(棺掘形)は、全長6.4m・幅0.6m、墓壇肩から最深部までの深さは約1mを測る。掘



第3図 ヌクモ1号墳埋葬主体部実測図

形の形状から棺の形態は、割竹形木棺と推定する。墓壇中央やや西側には、棺底部を掘り切る盗掘坑(直径約4m)が存在した。この盗掘坑は、第2主体部にも及んでいる。



第4図 ナクモ2号墳埋葬主体部実測図

出土遺物として、墓壇底東部から鉄剣1点・刀子2点・鉈1点が出土した。また、これら棺内遺物の直上から浮いた状態で鉄刀1点・鉄斧1点が出土した。鉄刀・鉄斧は出土状況からみて棺上遺物と判断する。さらに南側棺外から鉄鉈1点が出土した。墓壇底は東が

高く、鉄銚の先端も東を向くところから、遺骸の頭位は東側と判断する。

**第2主体部** 現存長2.8m・幅1.3mの墓壇掘形をもち、第1主体部と同様に2段に掘り下げている。2段目の掘形(棺掘形)は、現存長2.3m・幅0.5m、推定墓壇肩から最深部までの深さは60cmを測る。棺の形態は、組み合わせ式の箱式棺とみられる。墓壇の西南部は、盗掘坑と土坑によって攪乱を受けている。この埋葬主体部に伴う遺物の出土は見られない。

**ヌクモ2号墳** 1号墳の西南部下位に位置する。1号墳墳丘整形でできたテラスを利用し、小規模な盛土を行って墳丘を築いたとみられる。墳丘東北側に幅約30~50cmの浅い溝を「コ」の字状に設けている。古墳の中央部で木棺直葬の埋葬主体部を検出したほか、中世の掘立柱建物跡1棟、土坑1基を検出した。

**埋葬主体部** 全長5.1m・幅1.9mの墓壇掘形をもち、地山を2段に掘り下げている。棺の掘形は全長4.3m・幅0.57m、墓壇肩から最深部までの深さは60cmを測る。墓壇底には、仕切板を設置したとみられる幅約12cm・深さ約20cmの横溝が、1.9mの間隔をおいて2か所存在する。両溝間の墓壇底中央部(棺内)には、2~3cm大の河原石を全面に敷き詰めていた。この石敷の西端部には5~8cm大の河原石を2・3段積み上げていた。棺の形態は、組み合わせ式の箱式棺とみられる。棺内部分の小石が粘土とともに堅く平坦に突き固められていたことから、遺骸は直に石敷の上に置かれたと判断する。遺構・遺物の検出状況からみて、遺骸の頭は西に置かれたと判断する。2か所の溝で仕切られた東西両端部は、副葬品収納スペースと考えられる。ここには棺内と同様に石敷が認められたが、石敷自体は粗く敷かれ2~8cm大の河原石が使用されていた。

出土遺物として、棺内の頭部から盤龍鏡の一種である斜縁龍虎鏡(面径11.5cm)1面・勾玉4点・管玉19点、左手首位置から勾玉2点・白玉8点、棺外西から管玉33点・ガラス小玉15点・堅櫛8点(1点は小口部出土)が出土している。

**中世遺構** 古墳墳頂部から掘立柱建物跡2棟・土坑3基を検出した。建物1は、2間×3間の総柱建物跡であり、東西7.3m・南北5.2mの規模を測る。建物2は、2間×3間の



第5図 龍虎鏡実測図

総柱建物跡であり、東西7m・南北5.8mの規模を測る。柱穴内出土の土器片から、これら2棟の建物跡は14世紀代の建物跡と推定される。3基の土坑のうちの2基は、ヌクモ1号墳上にあり、埋土中には灰が混入していた。残る1基はヌクモ2号墳上で検出した。これらの土坑内に遺物は存在しなかった。

### 3. ま と め

ヌクモ1・2号墳は、福知山盆地を見下ろす丘陵頂部に築かれた、5世紀前半代の方形墳であった。1号墳には2基、2号墳には1基の埋葬主体部が存在し、いずれも地山を2段に掘り下げた、いわゆる2段墓壇と呼ぶ掘形をもつ木棺直葬の埋葬主体部であった。このような古墳は、山陰地方の中でも丹後・但馬地域に比較的多く認められる古墳であり、弥生時代からの墓制を引き継ぐ在地型の古墳として捉えられている。

今回調査を実施した両古墳の特色として、各埋葬主体部における副葬品の内容に顕著な差が認められた。1号墳第1主体部では鉄製品(武具・工具)のみ副葬する。同第2主体部では副葬品は認められない。このような副葬品にみる差異は、被葬者の性格差が表れているものと考えられる。副葬品の内容から、1号墳第1主体部の被葬者は政務を掌った人物であったとみられる。2号墳の被葬者は、副葬品が祭祀的な様相を持つところから、祭祀に携わっていた人物と推定される。ただ、1号墳の第1主体部は、後世に大きく破壊されていることから、他に副葬品が存在した可能性も高く、被葬者に関しては推定の域を脱しない。

ヌクモ2号墳出土の鏡は、鏡背の文様に一對の龍と虎が見返る状態で具象されている。内区の龍虎は半肉彫りで、図象の崩れはあまり見られない。外区には、外から波文帯・鋸齒文帯・櫛齒文帯が配される。この鏡は盤龍鏡の中でも龍虎鏡と呼ばれるものであり、舶載鏡とみられる。現在知られている盤龍鏡では、図象の獣が対面するものばかりであり、本例のような見返るモチーフは他に類例がない。

日本における盤龍鏡の出土は、近畿地方に集中する傾向があり、京都府では4例目にあたる。さらに、ヌクモ古墳群の西約6km、同じ福知山市の広峯15号墳でも盤龍鏡が出土していることから、同市で2例目となる。広峯15号墳出土の盤龍鏡には、存在しないはずの「景初四年」銘、本鏡では他に類例のないモチーフをもつ。このような特異な鏡を副葬する古墳が近接して存在することや、在地色の強い墓制が長期にわたって認められる当地域は、畿内とはやや異なる文化が存在したことを物語っている。ヌクモ古墳群の被葬者は、このような中の在地豪族であったとみられる。

(たけはら・かずひこ＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

## 長岡京跡右京第310次の発掘調査

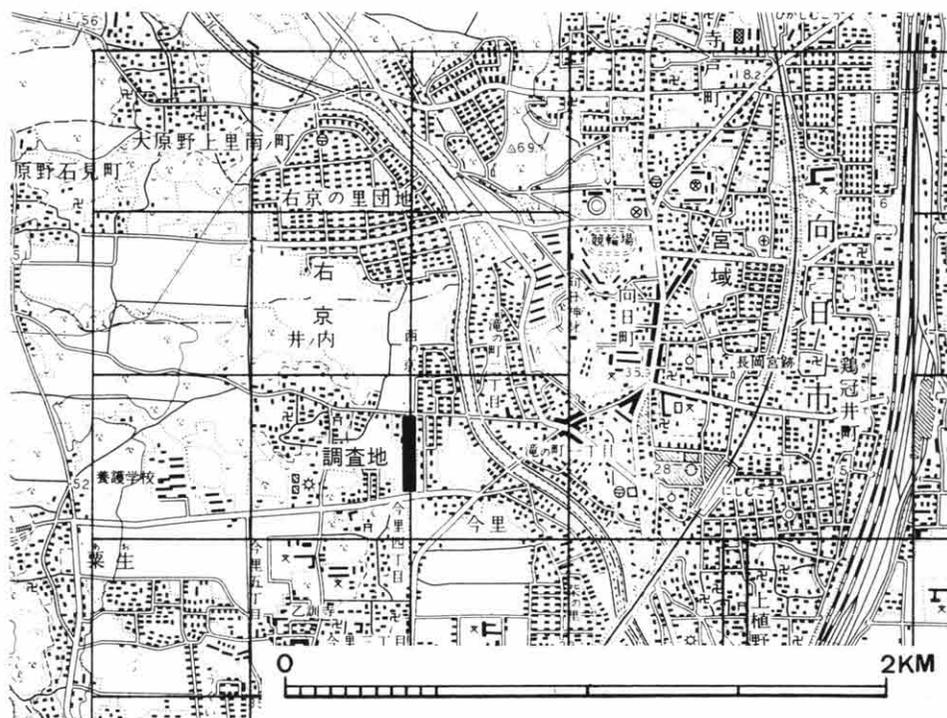
(7ANIFC・GSN地区)

石尾 政 信・土 橋 誠

### 1. はじめに

この調査は、都市計画街路(外環状線)改良工事に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。外環状線の発掘調査は、昭和52年以来、京都府教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが継続して行っている。今回の調査地は、長岡京市今里更ノ町・井ノ内下印田に所在し、昭和63年7月5日から平成元年3月28日まで、約2,100m<sup>2</sup>にわたって調査した。

調査対象地は、長岡京の条坊復原図によれば、右京二条二坊十四・十五町及び西二坊大路・二条条間大路の推定地にあたる。また、弥生時代から中世にかけての集落跡である今



第1図 調査地位置図

里遺跡の範囲にも含まれる。調査地は、長岡京市井ノ内から今里にかけて南北にのびる段丘の東側で、緩やかに東方に下がる扇状地形をなし、水田面の標高は30m前後を測る。

外環状線建設に伴う発掘調査及び周辺の調査は、20回以上行われ、これまでに、長岡京の西二坊大路東西両側溝・三条条間小路南北両側溝をはじめ、今里車塚古墳、今里庄々淵古墳、弥生時代後期～平安時代の集落跡などが検出されている。

昨年度の右京第285次調査では、西二坊大路東側溝、路面上の建物跡、二条条間大路南側溝、方形周溝墓などが確認された。

## 2. 調査概要

今回は、右京第285次調査地の北と南で発掘調査を行った。調査にあたって、右京第285次調査をAトレンチ、第310次調査をB～Eトレンチと仮称した。

この調査で検出した遺構には、近世～現代の土坑、中世の素掘り溝、平安時代の自然流路、長岡京西二坊大路東側溝・二条条間大路南側溝・路面上の轍、造営に伴う轍、石囲い溝をもつ井戸、奈良時代の自然流路、古墳時代の住居跡群・溝・土坑などがある。以下、検出した主要な遺構について記す。

### Bトレンチ

ほぼ全域で中世の素掘り溝を検出した。南北方向のものと東西方向のものがある。これらは、幅20～50cm・深さ5～20cmを測る。

西二坊大路東側溝(SD28501)は、Aトレンチから南に46mにわたって検出した。幅0.8～1.1m・深さ20cm前後を測る。この溝から少量の長岡京期の土器が出土した。

西二坊大路の路面上では、砂礫の入った轍(SX31002～06)を検出した。轍幅は10cm前後、轍の間隔は145cm前後を測る。

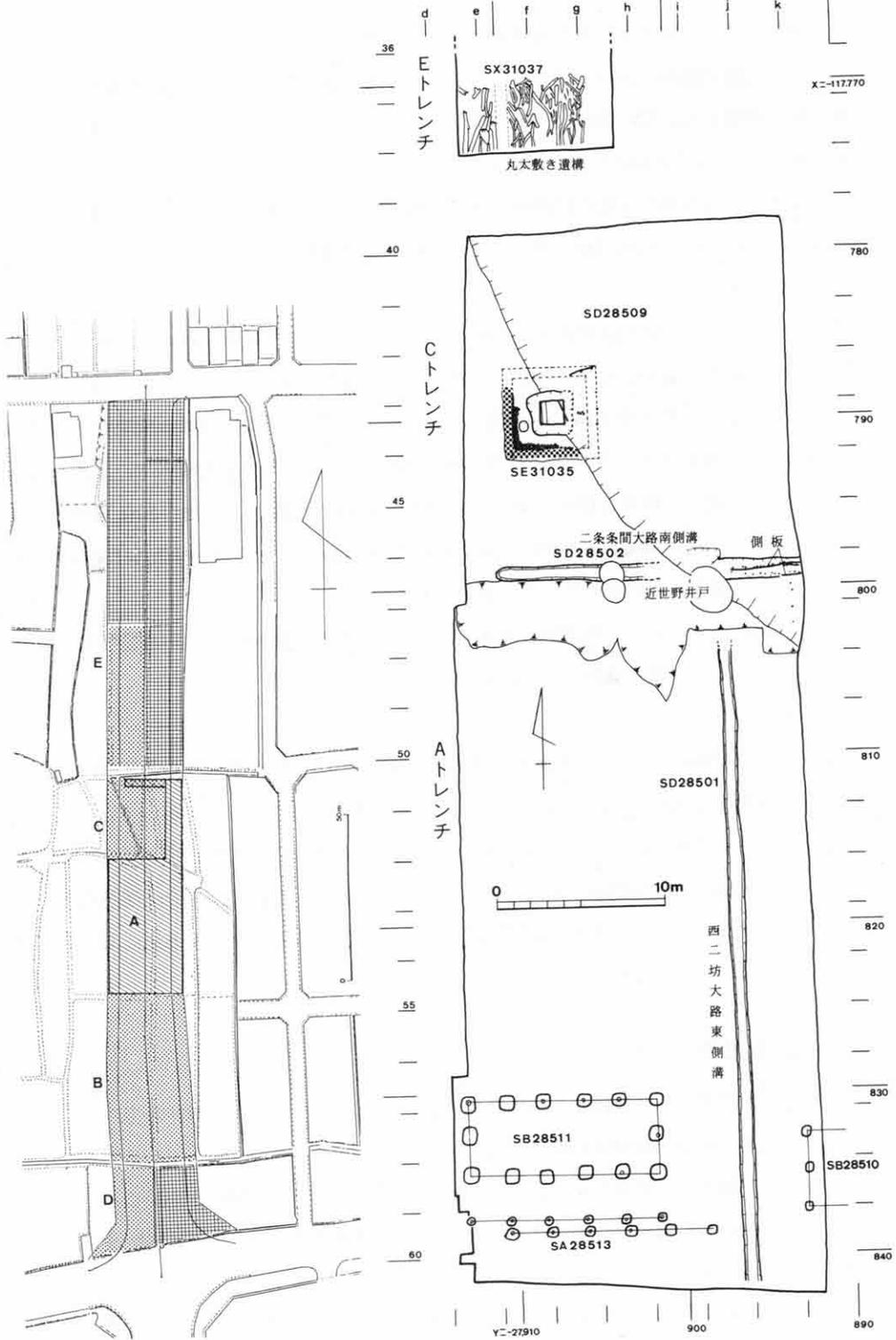
中央部で、砂礫の入った浅い東西方向の溝(SD31018～20)を検出した。幅20～40cmを測る。これらの溝が交差したり分岐する部分があり、東端は重なり広がっている。

下層では、北部で東方が南に曲がる東西方向の溝(SD31001)を検出した。この溝は、西方で幅1m前後・深さ0.4mを測り、東方はやや浅く、幅が広がる。溝からは、古墳時代後期の須恵器・土師器・紡錘車などが出土した。また、SD31001より南では住居跡群を検出した。住居跡のひとつSH31030は、7.3m前後の隅丸方形で北方にカマドがつく。複雑に切り合った住居跡もある。住居跡からは、古墳時代後期の須恵器・土師器などが出土した。

### Dトレンチ

南端で、東西方向の平安時代の自然流路(SD31011)を検出した。この北側では、奈良時

長岡京跡右京第310次の発掘調査



第2図 トレンチ配置図

第3図 遺構平面図(長岡京期前後)

代前期の北西—南東方向の自然流路(SD31012)を検出した。

西二坊大路の路面にあたる場所で、南北方向の轍(SX31007~09)、東西方向の轍群(SX31010)を検出した。SX31010は、轍が重なりあい、何度も行き来したことがうかがえる。轍の深いものでは20cm近いものがある。

下層では、古墳時代後期の柱掘形・土坑(SK31015)などを検出した。SK31015は、長径1.2m・短径0.7m・深さ0.2mを測る。ここから、須恵器の壺が出土した。

### C トレンチ

ここでは、二条条間大路南側溝(SD28502)が、西二坊大路を横断していることが判明した。この側溝は、幅0.8~1.0m・深さ0.2mを測る。西から東に向かって下がっている。

西二坊大路・二条条間大路の辻の真ん中にあたる位置で、敷石の排水施設をもつ井戸(SE31035)を検出した。井戸側は長さ1.4mの板を組み合わせた井籠組みで、上面にはぞの溝を施した極めて精巧な作りである。井戸側から約1.5m離れて、西と南に石敷きの溝が巡っている。西の溝幅は約50cm、南の溝幅は50~60cm、深さはいずれも15cm前後を測る。もとは四方に巡らされていたと推定される。

長岡京期に埋められた自然流路(SD28509)からは、木簡、木製品、土器(墨書土器含む)、瓦(軒瓦含む)など大量の遺物が出土した。

### E トレンチ

右京第285次調査について、長岡京の条坊にあわせて西二坊大路・二条条間大路を作る際に、この場所を流れていた川を埋めるという大工事が行われたことがわかった。トレンチ南端で、この工事に伴って、地盤の弱い部分に大量の丸太材を敷いていることが確認された。これは直径10~30cmの枝を払った丸太材を南北方向に並べ、その上面を粘土と礫によって突き固めたものである。路盤の改良にはよく使われる方法であるが、長岡京ではこれがはじめての例になる。

## 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代~近代にいたるさまざまな物がある。そのうちでは、古墳時代後期と長岡京期前後のものが多い。

自然流路(SD28509)を埋め立てた土のなかから、大量の土器や木製品に混じって、墨書土器、文字を記した檜扇、3点の木簡が出土した。墨書土器には、『田万呂』・『女』・『十八』・『□南』・『□司』・『宮□』・『園司』・『園宅』と読めるもの、『⊕』・『\*』のような記号などがある。『園』と読めるものは、右京第285次調査と合わせると10点になり、園に関係する官司名と考えられる。



文字が記された檜扇は、3枚が重なり手元に円形の孔を穿っており、その孔に桜皮が残っていた。檜扇は、長さ285mm・最大幅25mm・厚さ1～2mmを測る。扇の先端が焼け焦げているもの、欠損したものがある。文字は、扇の中央より上に片側によせて記され、両面にみられる。他に2枚の檜扇があり、うち1枚に墨痕が認められる。使えなくなった檜扇を、木簡として再利用したものと考えられる。釈文については、欠損などにより読めない部分があるが、およそ次のように読める。 (石尾)

(ア)

(表)・従七位下勲十等

(裏)・×上六人部連真□

(イ)

(表)・□□□定□

(裏)・従六位上勲九等葛□<sub>野カ</sub>臣氣右万呂

(ウ)

(表)・□□□

(裏)・×□□ [ ] □

木簡のうち、下層から見つかった2点は大型で文書様木簡と呼ばれている。釈文については墨が薄く、かなり読めない部分があるが、およそ次のように読める。

(一)

・□□□□二斗二升

型式 051

168×20×4

(二)

(表)・御司召 上加□園依 上加□虫万呂 秦得万呂 加□乙人  
右三人等為流人送召件人等宜承知□

型式 011

(裏)・□□□ □□□□□□□□□□□□又不□□<sub>民カ</sub>  
□□ □□□□□□□□□□□□月□日□□

352×33×4

(三)

(表)・御司召田邊□□□人□□丁一人又 [ ]  
為長言カ 斯カ

011

(裏)・亦召□□□急々向□□□  
大□ 八月廿二日□□

428×35×7

## (一)

これは、どこからか送られてきた物品に付けられていた典型的な「貢進物付札」の形態をとる。祭祀遺物の中の斎串も同様の形態をとるものがあるが、数字の一部が判読できるので、「貢進物付札」ととる方がよからう。

一字目は、「臺」の異体字「臺」にも読めるが、詳しくはわからない。二字目は、「麻」とも「床」とも読めるがどちらとも決めがたい。三字目ないしは四字目は、一音一字で表記する物品か、または「万呂」と読んで人名とも思えるが、判読できないため、何であるかはにはわかには判定できない。裏面には文字は書かれていなかった。

## (二)

「御司」からの召状である。表面には四名が列挙してあり、流人をどこかへ移送するために召喚された人の名前であろう。宛所は、書かれていない。これは「御司」所属の人間（白丁か？）を召すためのものであるため、四名を宛所とみるべきかもしれない。裏面にも文字が書かれてはいるが、墨が薄くなっていてほとんど判読できない。わずかに、「□月」が見え、この召状の出された月日の書かれていたことがわかるが、年次の部分が判読できないので、いつの時点かを特定することはできない。

## (三)

これも、(二)と同じく「御司」からの召状で、「田辺」氏の誰かを召すことが書かれている。表裏とも、墨跡がある程度で、かなり薄くなっているため判読できない文字が多い。日付けの「八月廿二日」は読めるが、何のための召状であるのかは定かではない。

「御司」は、(二)・(三)の記述からみて、ある時点で「流人」の移送にかかわった官司であるが、官司名を知ることにはできない。

以上のうち、「流人」移送のための召喚状は注目すべきものである。律令の規定では、流罪は、死罪の次に重く、五刑の内でもかなり重い刑罰である。獄令の規定によれば、配所へ移送するときは一年の四季別、すなわち四回にわけることになっている。しかも、配所の決定も刑部省で予定して、太政官の裁決を経なければ決まらず、移送するときも良人ならば内印、賤民ならば外印を押した太政官符が出されてから行うことになっており、流人をはじめ、罪人に関する裁決権は太政官にあった。しかも、移送に当っては、流人は妻妾・家口も同行させねばならず、移送時までは刑部省や各国に収監された。移送する時には専使が任命されて、それが移送の任にあたるが、移送に際しては「防援」を加えるとも規定されている。また、護送には軍団の少毅も別にあたることになっていた。

この木簡は、流人を移送するために必要となった人物を召喚するのであるから、四季のいつかの時点で、移送を許可する旨の太政官符が出されてからと考えられる。十世紀の史料になるが、『延喜式』の記述によれば、流人を移送するときは、刑部省が太政官に申告してから左右兵衛府に専使を出すように請願することになっている。そのため、この木簡には宛所が書かれてはいないが、左右兵衛府の可能性もある。そうすると、「御司」は、刑部省か囚獄司の可能性も出てくる。しかし、「御」のつくものは、八世紀の史料では天皇に関する事項・物品などにしか用いていないので、刑部省関係の官司としてしまうと、「司」という官司を表わすことばに「御」をかぶせることの意味が明らかにはならない。

むしろ、出土した墨書土器に、「園司」・「園宅」・「園」とあることから、この「御司」を「園司」と解釈するほうがよいように思われる。園司は、<sup>(注1)</sup>律令の規定にはない官司ではあるが、中央の宮内省には被官として園池司が存在することから、この園池司に属する各地の園に付属した官司のことと推定される。その実態についてはほとんどわからないが、『令集解』職員令園池司条所引の古記によれば、中央の園池司には、「別記云、園三百戸、径年一番役百五十戸、爲品部、免調雑徭」とあり、園戸が付属していた。園池司は寛平8(896)年9月に内膳司に統合されるが、『延喜式』には「園池卅九町五段二百歩」として、京北園・奈良園・山科園・奈癸園・羽束志園・泉園・平城園が見える。また、同じ『延喜式』には、「供御月料」として箸竹90株を「山城国乙訓園」が負担する規定になっており、朝廷の一種の供御料を負担するところであったことがわかる。

旧乙訓郡には、上記の羽束志園・乙訓園以外に長岡園が見える。これも『延喜式』の内膳司のところにあり、「園神祭十四座」のうち「三座」があったことを記している。『延喜式』は10世紀の書物であるため、8世紀に乙訓郡に園があったとは必ずしも言えないが、8世紀後半頃の墨書土器に園の存在を示す「園司」・「園宅」が見えること、天皇に関係する事項・事柄にしか用いない「御」を冠した官司が見えることなどからみて、この地域に長岡京遷都直前に朝廷の供御料を負担する園があり、平安時代の乙訓園などへとつながった可能性がある。

そうすると、園と流人の移送はどのように考えればよいのであろうか。『延喜式』の規定では、「凡流移罪人者、省申遞請左右兵衛、爲部領、即授省符、路次差加防援、令達前例、」とあり、移送の路順の地域も「防援」を加えることになっていた。園司が行っていたのはこの「防援」にあたるものとは解釈できまいか。4名は、園に勤務する白丁であるらしく、そのときにたまたま流人移送になり、これらの人が召し出されたとみるのがよからう。

ところで、この木簡は、召喚状と呼べるが、木簡による召喚状の例は、平城京出土木簡

でも見られ、主として非番の官人を呼びだすものが多い。最近では、長屋王家出土木簡の中に、雅楽寮から長屋王家令所へ倭舞のために人を召喚した例を挙げることができ<sup>(注2)</sup>、このような例はこれまでも数多く紹介されている。召喚状として考えるならば、この場合でも、「流人」木簡でも同様に人とともに木簡が移動したことを念頭に置かなければならない。すなわち、流人を移送するために人を召喚するに際して、宛所で廃棄された場合と、宛所から人とともに移動してきて「御司」で廃棄された場合である。平城宮出土例では、二通りあるようなのでいずれとも決めたいが、「御司」木簡があと一例、「御曹司」木簡が一例あることから、人とともに移動して人物を確認した上で召喚した方の官司で廃棄された可能性が高いとみてよからう。(土 橋)

#### 4. ま と め

これまでの調査成果をまとめると、以下のことがわかる。

ア、右京第285次調査とあわせて、西二坊大路東側溝を80mにわたって検出した。東側溝は、北で西へ振れていることがわかった。轍が見つかったことから、この溝より西が路面であることがわかる。

イ、二条条間大路南側溝が、西二坊大路を横断することから、二条条間大路が優先的に通された可能性が高い。ただ、地形が西から東に傾斜しているため、断定はできない。

ウ、今回も、自然流路(SD28509)が長岡京期に埋めたてられたことを再確認した。この自然流路を埋める大工事の際、丸太材を敷き並べ、上面を粘土と礫で突き固めた路盤の改良工事が施工されたことがわかった。長岡京では初めての例になる。

エ、西二坊大路の路面で、縦断する轍(長岡京期)に切られた横断する轍が重なりあって検出された。この轍群は、長岡京の造営に伴うものと推測される。また、轍群の位置は、乙訓郡の条里にほぼ一致する。

オ、長岡京の造営にあたって埋めたてられた自然流路の下層からみつかった墨書土器に『園司』・『園宅』があり、木簡の『御司召』からこの周辺に園に関係する施設が存在した可能性がある。

カ、西二坊大路と二条条間大路の交差点で検出した石敷きの排水施設をもつ井戸は、出土遺物、自然流路の堆積・埋めたて状況から長岡京の造営に伴って(大路が造られたとき)廃棄されたものと考えられる。埋められた自然流路の下層から見つかった土器や木簡などとの関係が注目される。また、この井戸は、南方約40m(右京第285次調査)で検出した2間×5間の掘立柱建物跡(SB28511)と同時期の可能性が高い。遷都前後のようすをうかがえる貴重な資料である。今後、土器資料や土層を綿密に検討していく必要がある。

キ、東西方向の溝(SD31001)より南で住居跡が検出されることから、SD31001は一時期の区画溝であることがわかった。時代は異なるが、溝より北では方形周溝墓がつくられる。これらのことから、自然流路(SD28509)の南まで今里遺跡の範囲に含まれると推測される。自然流路(SD28509)は、古墳時代には川として機能していたと推定でき、今里車塚古墳の葺き石をこの川から採取した可能性が考えられる。

付記 木簡の积文・墨書土器等の解釈にあたって京都教育大学教授和田 萃・(財)向日市埋蔵文化財センター清水みき両氏の多大な御教示を得た。

(いしお・まさのぶ=当センター調査第2課調査第3係調査員)

(どばし・まこと=当センター調査第1課資料係調査員)

注1 園司の解釈については、(財)向日市埋蔵文化財センター清水みき氏の御教示を得た。

注2 長屋王家木簡については、奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査出土木簡概報』(21)による。

## 集落遺跡に伴う不整円形土坑群

奥村清一郎

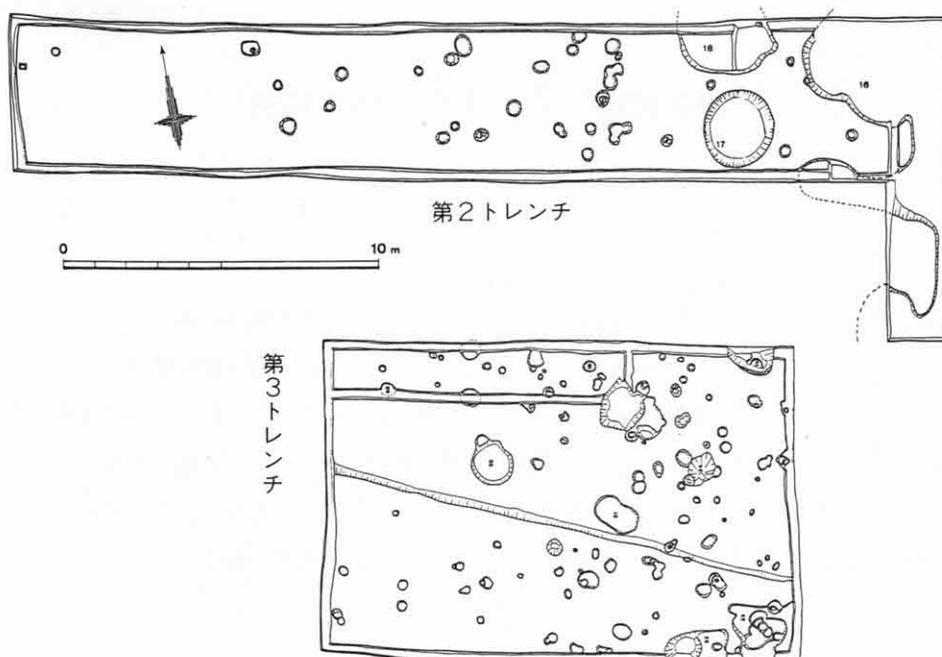
### 1. はじめに

集落遺跡およびその近辺で普遍的に見いだされる、いわゆる土坑は、陥し穴・ゴミ穴・貯蔵穴・墓穴・井戸・立木の抜き取り穴・柱穴・土取り穴・便所穴・貯水槽など実にさまざまな用途・目的のもとに掘りぬかれたものと推察される。ただし、我々が発掘現場で通常検出する土坑すべてについて、その用途・性格を特定することは、現在の状況では不可能に近い。本稿は、これらの土坑のなかでも、不整円形を呈する土坑が、ごく限定された範囲内に密集して営まれた事例をいくつか取り上げ、これの性格の特定を試みようとするものである。

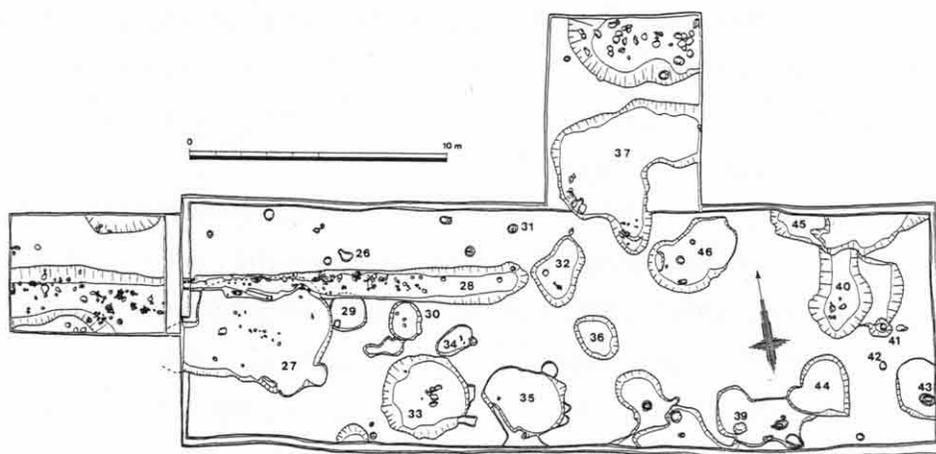
### 2. 京都府における事例

管見にふれた類例としては、与謝郡野田川町寺岡遺跡、綾部市三宅遺跡、北桑田郡京北町上中遺跡、亀岡市千代川遺跡の4例を挙げることができる。これらの4遺跡は、それぞれに若干様相を異にしているので、以下各遺跡における検出状況について、報告書ならびに調査担当者の所見に基づいて概略を述べることにする。

**寺岡遺跡** 野田川によって開析された加悦谷と呼ばれる河谷平野の中流部右岸、北方にむかって舌状にのびる長さ約350m・最大幅150mを測る台地性丘陵上およびその縁辺部を占める遺跡である。昭和62年、町営は場整備事業に関連して発掘調査が実施され、弥生中期から平安時代におよぶ各時代の遺構ならびに遺物が広範囲にわたって検出された。本稿の主題とする不整円形土坑は、丘陵上でも南端部のつけ根に近い地区(南地区)から集中的に検出された。第2・第3トレンチでは、大小さまざまな規模の土坑群が検出されている。この中で比較的整った形状をしめすものは、第2トレンチ検出のSK17で、径2.3mの円形を呈し、スリバチ状に深さ0.8mにわたって掘り込まれていた。最大のものは、第2トレンチで複雑な動きをしめす西肩のみを検出したSK16で、全体の規模・形状ともに未確認である。その他の土坑群は、長軸1～2m前後、短軸1m前後の不整な円形または不定形をなし、内壁面・底面ともに凹凸が著しいのを特徴としている。いずれの土坑も、黄色粘土層を基盤層とし、黒色土(クロボク)を埋土とするが、伴出遺物に乏しく、時期を限定するのはむずかしい。第2・第3トレンチの北約15m地点に設定した第6トレンチにおいて

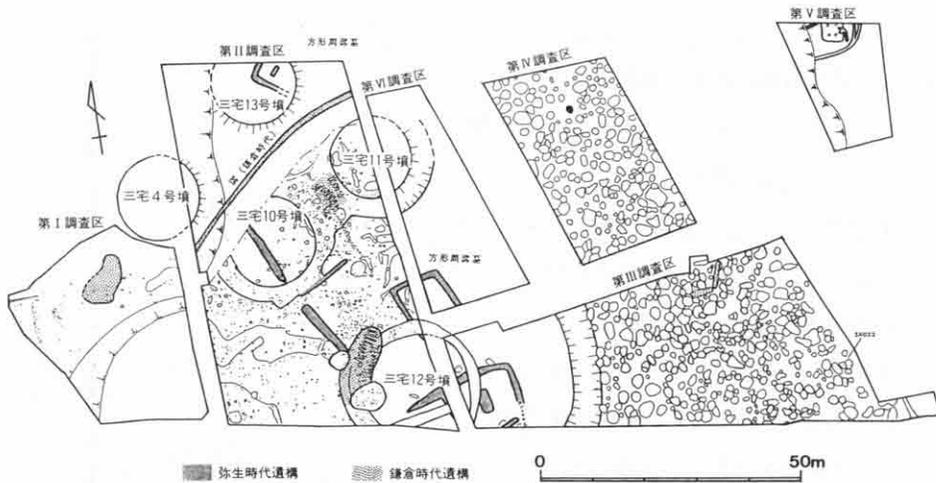


第1図 寺岡遺跡第2・第3トレンチの土坑群



第2図 寺岡遺跡第6トレンチの土坑群

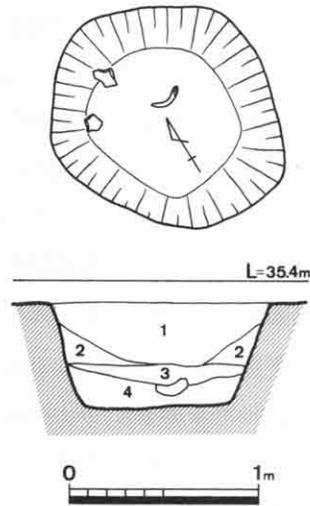
も、大小さまざまな不整形土坑群が検出されている。弥生中期の溝SD28を取り囲むように配置されているが、掘削の年代は、弥生後期以降に属するものが多いようである。これらのうち、SK30・33は、スリパチ状に掘られた円形土坑で、弥生後期の土器を伴う。SK32は、長さ2.3m・幅1.5m・深さ25cmを測る不整形土坑で、坑底面上から、庄内式併行期の甕の完形品1個体が土圧で押しつぶされたような状態で検出された。このほか、形状・規模ともにさまざまな不定形土坑多数があり、埋土中には、主に弥生中期から古墳



第3図 三宅遺跡の土坑群

前期にかけての土器片を含む。いずれの土坑も、黄色粘土層を基盤層とし、黒色土を埋土とする点は、第2・第3トレンチの土坑群と同じである。

三宅遺跡 福知山盆地の中央を西流する由良川の、一支流である、犀川流域の平野部に形成された複合遺跡である。昭和62年から63年にかけて、近畿自動車道舞鶴線建設工事に伴って発掘調査が行われた結果、古墳後期の円墳5基(三宅古墳群)、弥生中期の方形周溝墓3基、弥生後期末～布留式併行期の土坑群、古墳後期の竪穴式住居跡1軒、鎌倉時代の畝状遺構・土坑群などが検出された。ここで注目されるのは、三宅古墳群と東方の丘陵地—以久田野古墳群がある一との間の平地部で検出された土坑群である。昭和62年に調査が行われた第Ⅲ調査区の東部では実に336基もの土坑が密集した状態で見いだされた。さらに昭和63年にその北接地(第Ⅳ調査区)において185基の土坑が追加確認され、第Ⅲ・第Ⅳ調査区あわせて521基の土坑が、ごく限られた範囲に集中的に営まれていることが明らかとなった。これらの土坑群の平面形は不整な円形または楕円形を呈し、その規模は、「小さいもので0.6m、最大のもので3.4m、深さは40～90cm」を測る。各土坑は、全体として黄白色粘土層の地山をスリパチ状に掘り凹めているが、壁面・底面ともに凹凸が著しい。埋土は、黒色系・暗灰色系・暗茶褐色系を呈する粘質土の水平堆積あるいは斜め堆積からなり、全体の約6割の土坑の埋土内から、弥生後期末から布留式併行期にかけての土器片が見いだされてい

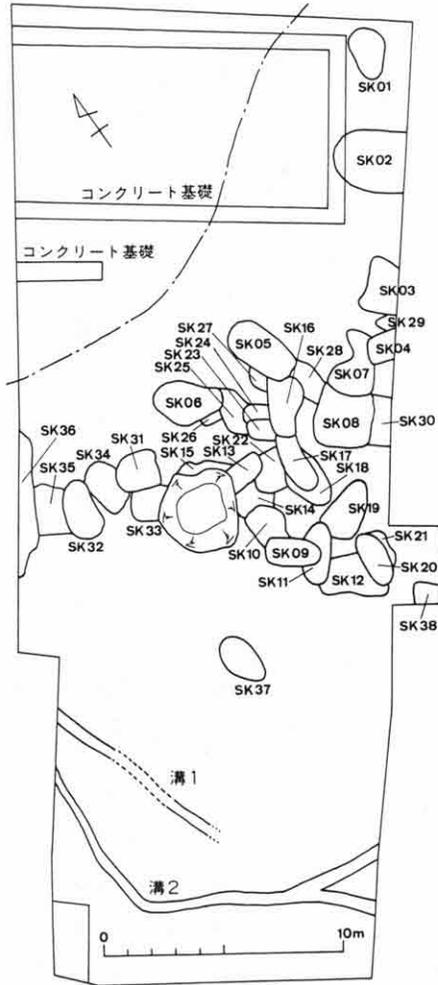


第4図 三宅遺跡土坑実測図  
(第3図黒塗りの土坑)

1. 暗灰色粘土 2. 暗灰色粘土(黄色粘土ブロック含む) 3. 暗灰色泥土 4. 暗灰色粘土

る。また、板状木製品を伴う土坑もみられる。これらの土坑群は限られた範囲に密集しているにもかかわらず、大半のものが切り合い関係をもたないのが特徴である。

**上中遺跡** 大堰川上流部に開けた周山盆地は、大堰川本流の流域に属する山国盆地と支流の弓削川流域に属する弓削盆地とに分かれる。上中遺跡は、弓削川の右岸の台地上を占める弥生時代から鎌倉時代に及ぶ複合集落遺跡である。府立北桑田高校の改築工事に伴い、これまで5度の調査が行われ、弥生後期末から古墳前期にかけての土坑群、古墳前期の竪穴式住居跡1軒、奈良中期の竪穴式住居跡1軒などの遺構が確認されている。不整円形土坑群は、昭和60年に実施された第3次調査の時に合計38基検出されたものである。これらの土坑群は、地山上層の黒褐色土の上面を検出面とし、地山下層の黄褐色ないし黄白色粘土層をも掘り込むもので「平均規模は、長軸約2.4m、短軸約1.3m、深さ約60cmを測る」。各土坑は、壁面・底面ともに凹凸が著しく、また多くのものの壁面は袋状にオーバーハングして、「棒状のものでえ



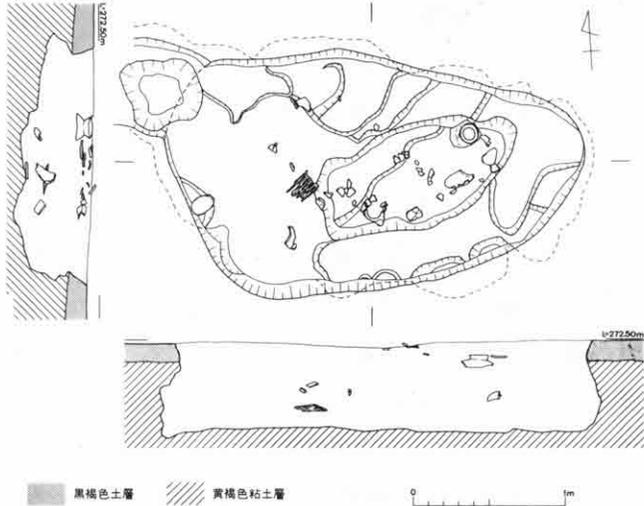
第5図 上中遺跡の土坑群

ぐり取られたような」状況を呈していた。埋土は、地山上層の黒褐色土と地山下層の黄色粘土の混合土からなるが、大半の土坑は複雑に切り合っていて掘削時期の前後関係を見極めるのはきわめて困難であった。土坑内からは、大小の破片となった弥生後期末から古墳前期にかけての土器片のほか、板材の断片などが見いだされている。埋土の状況は「一気に埋まった様相を呈して」おり、伴出土器群にもそれほどの型式差は認められないことから、これらの複雑に切り合う土坑群は、壁面を掘り崩すような状況で連続的に掘り広げられた結果によるものとも推察される。第5次調査で検出された古墳前期の竪穴式住居跡SB01は、上述の土坑群とはほぼ併行する年代に属するもので、SB01の北東約100mの地点に土坑群が位置している。

**千代川遺跡** 亀岡盆地の北西部に位置する、縄文時代から中世におよぶ大規模な複合遺

跡である。とくに遺跡の北半部の一角は丹波国府の推定地として広く世に知られている。本稿で取り上げる不整形土坑群が検出されたのは、遺跡の北西部、推定丹波国府の西限推定地において、国道9号バイパスの建設に先立つ緊急調査として実施された第10次調査と第12次調査の時である。

土坑群は北西から南東方向にのびる延長100m以上、幅30m前後を測るベルト地帯のなかに集中的に分布しており、トレンチ内で確認できただけでも25基もの数を数える。報告書によると、「平面形が円形に近く壁が垂直に立つもの」と「平面長楕円で壁は斜めに上がるもの」の2タイプに大別され、「うち幾つかは当時の墳墓」とみる見解が示されている。黄色粘土層を基盤層とし、黒色土を埋土とする点は上記の3遺跡と同じである。土坑内からの出土遺物にきわめて乏しく、年代を決定しにくい、埋土の様相などから弥生後期に属するものと考えられてい



第6図 上中遺跡 SK19 実測図



第7図 千代川遺跡の土坑群

る。ほかに弥生後期に属する遺構としては、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡各1棟、大小の溝などがある。これらの遺構の分布状況などからみて、弥生後期の集落は調査地の西方に展開し、不整形土坑群は集落の外周を取り囲むような状況で配置されたものと思われる。

### 3. まとめにかえて

まず、集落と不整形土坑群との位置関係について整理すると、土坑群は居住区とはある一定の距離をおいて配置されているらしいことがうかがえる。千代川遺跡では、居住区の外側に幅40～50mの広場がめぐり、さらにその外側を土坑群が取り囲むような状況で配置されている。三宅遺跡では、少なくとも調査区内では土坑群と並行する時期の居住跡は確認されていない。また上中遺跡でも、詳しくはわからないが、竪穴式住居跡と土坑群とは100mの間隔をおいて検出されている。位置関係からみれば、これらの土坑群は、ゴミ捨て穴・便所穴・貯蔵穴などの居住区での日常生活に密着した遺構となる可能性は極めて低いといえよう。

形態についてみてみると、平面形は円形に近いもの、楕円形のもの、不定形のものなど各種あり、壁面の状況もスリパチ状になったもの、直立するもの、袋状にせりだすものなどがある。規模についても大きささまざまなものがあり、形状によって類型化することは極めて困難である。

基盤層についてみてみると、ここに例示した4遺跡の土坑群すべてが、黄色系の粘土層をベースとしている。これは偶然の一致ではなく、むしろ意識的に粘土層の分布する地点を選んで掘られたのではないかと推測される。

埋土層の特徴として、地山である黄色系の粘土層または粘土ブロックの占める比率が極めて少なく、大部分が黒色土(クロボク)・黒褐色土からなる点を挙げうる。層序は、黒色土単一層の場合もあるが、レンズ状をなす土層の水平堆積あるいは斜め堆積が重なり合う状況をしめすばあいも多い。三宅遺跡や寺岡遺跡での観察によると、最下層や中層において、水分を多く含んだ泥土状をなす土層の堆積が認められた。このような埋土の状況から、これらの土坑群はなんらかの目的のために開掘され、その後埋め戻されることなくそのまま放置された結果、表土層やクロボク層の自然作用による流入によって埋積したものと考えられる。三宅遺跡では、水や泥のたまった掘り穴をさけるようにして短期間のうちにつぎつぎに開掘された結果、あたかも月面のような穴だらけの地表面が現出したのではないかと想像される。寺岡遺跡では、不整形土坑群のほか、方形周溝墓、竪穴式住居跡、溝などの遺構が多数検出されたが、不整形土坑群の埋土の状況は、竪穴式住居跡や溝などの自然的埋積による遺構のそれに近く、掘削の直後に掘った土で埋め戻されたと予想され

る方形周溝墓の主体部とは大分異なっていた。

出土遺物については、三宅遺跡と上中遺跡から板状木製品と土器、寺岡遺跡から土器の出土がそれぞれ報告されている。このうち板状木片は、土坑の掘削時に使用されたものの残欠かとも思われるが、くわしくはわからない。土器についても、意識的な埋納・投棄・供献をうかがわせる資料は極めて少なく、むしろ無意識的な混入・流入によるものが大多数を占めるようである。

以上の整理によっても明らかのように、集落遺跡の居住区から少し離れた場所で見いだされる不整形土坑群の中には、土器作りや住居の壁などに要する粘土を採掘した跡がある一定程度含まれるのではないかとみるのが小稿の結論であるが、確証と叫ぶものはなく、まだまだ推測の域を出ないのが現状である。でも、土坑を安易に、直感的に土墳墓と決めつけてしまうことのこわさを少しでも感じ取ってもらえれば、小稿の目的の大半は達せられたものとしたい。

(おくむら・せいいちろう=当センター調査第1課企画係長)

(引用文献)

- 奥村清一郎・後藤公一・竹原伸仁『寺岡遺跡』(京都府野田川町文化財調査報告 第2集 野田川町教育委員会) 1988
- 竹原一彦ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 竹原一彦「三宅遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第31号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 増田孝彦「上中遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第18号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 増田孝彦「上中遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 岡崎研一「上中遺跡第5次」(『京都府埋蔵文化財情報』第26号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 岡崎研一「上中遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 森下 衛・西岸秀文「千代川遺跡第10次の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第19号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 森下 衛ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第21冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 森下 衛「千代川遺跡第12次の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 森下 衛「昭和61年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

## 平成元年度発掘調査略報

## 1. 川向1号墳

所在地 京都府熊野郡久美浜町大井  
 調査期間 平成元年4月12日～7月20日  
 調査面積 約220m<sup>2</sup>

はじめに 川向1号墳の調査は、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて、同局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の大井団地造成に伴う道路建設の事前調査として行った。この古墳は、佐濃谷川に面した比高差約45m程度の丘陵端に造られており、周囲の数基の古墳とともに古墳群を形成している。この古墳群中の最高所に1号墳は位置している。

調査概要 この古墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳である。墳丘は、墳丘裾が不明であるが、径14～16m程度と推測する。石室は、右側に袖を有する右片袖で、全長5.85m、玄室長4.35m、同幅(中央部)1.55m、羨道長1.5m、同幅(玄門部)1.1m、石室現存高1.45mを測る。玄室の幅に比べて玄室が長く、玄室に比べて羨道部が短いのが特徴である。羨道部には閉塞石が遺存していた。石室の石組みは、全体に西側にずれており、土圧や地震によって生じたと推定される。墳丘の東側は、幅約2mの溝によって丘陵と墳丘が切り離されて区画されている。この溝から須恵器が10数個体出土しており、石室内出土土器片



第1図 調査地位置図(1/50,000)

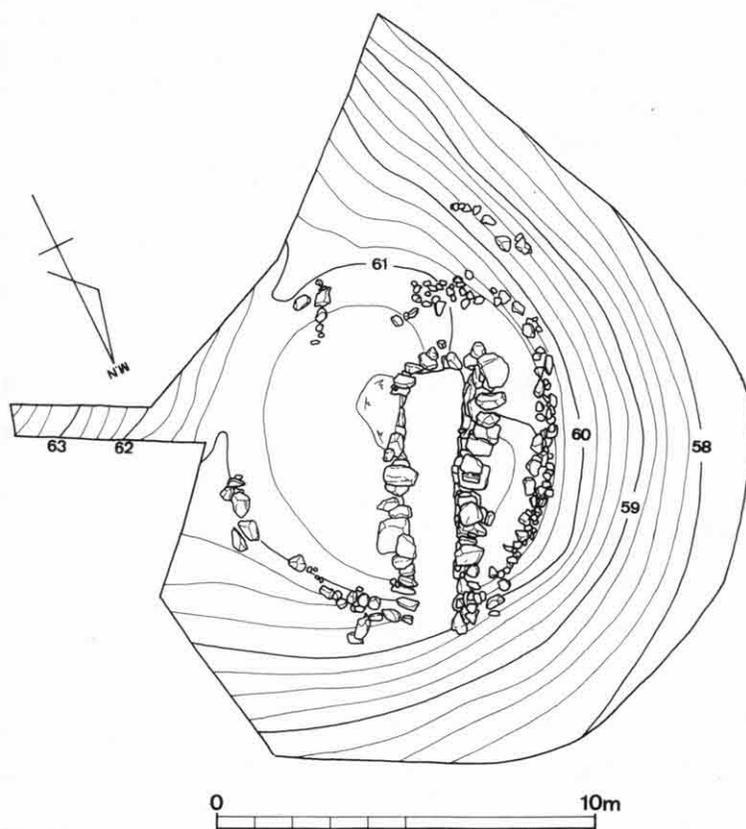
と接合できるものもあり、盗掘の際に廃棄されたものと判断される。また、墳丘には一部二重に巡る列石も検出している。これらは、外護列石のように墳丘の表面に露出しておらず、墳丘盛土の流出を防ぐために、盛土内に埋め込まれていたと推定される。残りのよいところでは、四段に石を積み上げている。

石室内は、盗掘を受けており、遺物はあまり出土していない。須恵器杯身・杯蓋のほか、鉄器(刀3、鋸1、鎌、刀子)、装身具(耳環2、勾玉1、切子玉2、管玉3、小玉4)、

紡錘車1が出土した。出土状況として興味深いのは、羨道部で検出した閉塞石上に須恵器杯蓋4枚を重ね、鉄刀2とともに置かれていた点である。ほかに、埋葬面上の左側壁に沿って、棺台を2か所で検出した。出土須恵器から、6世紀後半の築造といえる。

まとめ 久美浜町は、大きく川上谷川と佐濃谷川の二本の河川に沿って、細長い平野が開けている。川上谷川流域には、環頭大刀の出土で著名な湯舟坂2号墳があり、この地域の「盟主」的地位にあったと想像される。今回の地域では、もう一つの佐濃谷川流域の古墳時代社会の動態を窺う資料をえたといえよう。

(岩松 保)



第2図 古墳測量図

## 2. 西山館跡

所在地 京都府福知山市観音寺小字西山  
 調査期間 平成元年5月19日～6月14日  
 調査面積 100m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、近畿自動車道敦賀線建設工事に伴うものである。調査地は、福知山市と綾部市の市境近くであり、福知山市街地と綾部市街地のほぼ中間地点にあたる。

調査地は、南側の山地からほぼ北方向にのびる谷の東西両側に位置する。谷の東側の調査地は、谷に沿ってのびる尾根の北端部の狭い平坦地である。西側の調査地は、谷に向かってわずかに張り出す小尾根端部の平坦地である。それぞれに試掘坑を設定して調査した。仮に、谷東側のものを1トレンチ、西側のものを2トレンチとする。

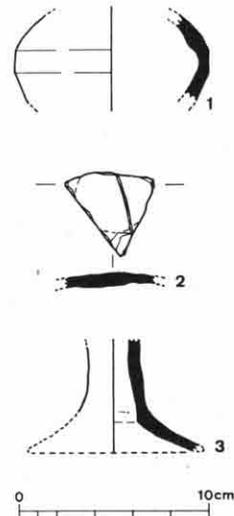
調査概要 1トレンチは、尾根の方向にあわせて南北方向に設定し、一部、東側へ拡張した。このトレンチの基本的な層序は、表土の腐植土の下に黄灰色土の間層があり、その下は、地山となる。南半部で、地山のくぼみに黒灰色土が堆積する部分を検出した。黒灰色土には、須恵器片・土師器片が少量含まれる。これらの土器片は、古墳時代後期頃のものと思われる。また、地山のくぼみは、周囲の状況から見て、旧山道とみられる。

2トレンチは、尾根の方向に合わせて東西方向に設定した。基本的な層序は、表土の腐植土の下に層厚30～70cmの置土があり、その下は地山の岩盤である。置土中から、少量の須恵器片・土師器片が出土した。このような状況からみて、植林等のため、尾根の上部を削平して南側の谷を埋め、平坦地を造成したものとみられる。

まとめ 今回の調査では、顕著な遺構遺物は検出しなかった。調査地周辺の地形は、植林等のために人為的に改変されているものとみられる。出土遺物からみて、かつては古墳等の遺跡があったとみられるが、現存していない。(引原 茂治)



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 出土遺物

資 料 紹 介

温江遺跡検出の土坑

——丹後地域弥生時代後期における貯蔵形態の一例——

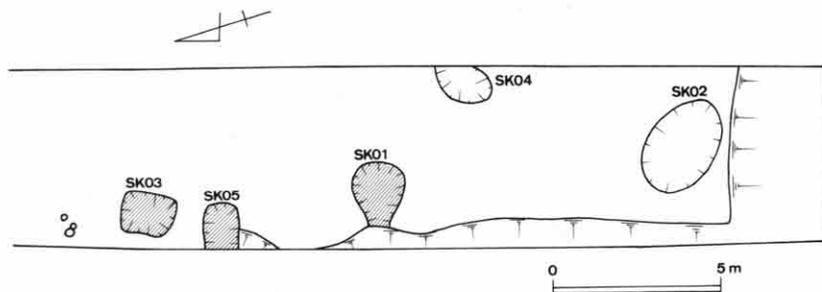
森 正

1. はじめに

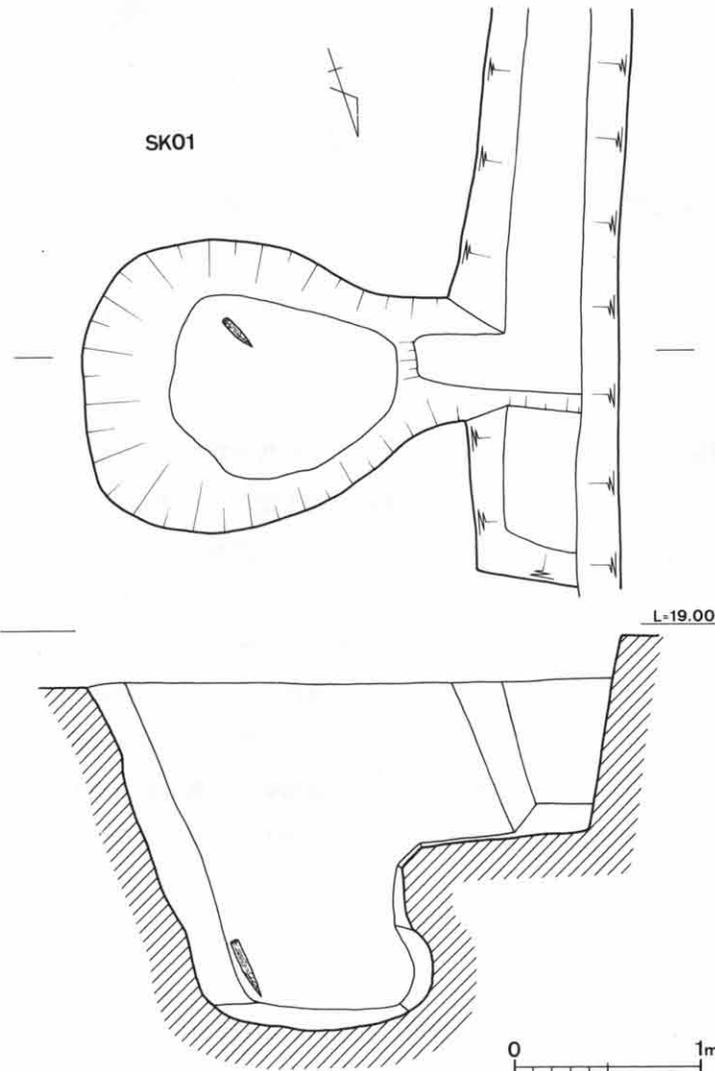
温江遺跡は、京都府与謝郡加悦町字温江・加悦に所在する弥生時代中期から平安時代にかけての集落跡である。当センターでは、京都府土木建築部の依頼を受けて、一般国道176号の道路新設改良事業に伴い、昭和63年10月から平成元年2月にかけて調査を実施した。昭和63年度は、第1次調査として試掘調査を実施し、一部については、面的な調査を行った（第1トレンチ）。全体としては、過去のは場整備の影響で遺構の残存状況は悪かった。そのなかで特に注目されるものとして、第1トレンチにおいて検出した弥生時代後期の縦掘りされた土坑群がある。これらの土坑は、形態・遺跡内でのあり方等から、屋外の貯蔵穴としての機能を果たしたものと考えられ、丹後地域における貯蔵形態の一事例を示すものとして重要である。今回は、各土坑の概要を紹介するとともに、若干の私見を述べてみたい。

2. 各土坑の概要

第1トレンチは、幅約5m・長さ約65mで南北方向に設定した。ここでは、古墳時代前期の竪穴式住居跡1基、弥生時代後期の土坑6基、ピット等の遺構を検出した。土坑は、



第1図 第1トレンチ遺構配置図(部分)



第2図 SK01 実測図

トレンチの南半部に集中しており、特に今回報告する3基の土坑(SK01・SK03・SK05)は、トレンチ西壁沿いにそれぞれが近接してある。この3基の土坑のもつ大きな特徴としては、深く縦掘りされている点にあり、深さが2mに及ぶものもある。

#### 土坑1

平面形は、西側がすぼまるやや扁平なとっくり形を呈しているが、延長部分は削平を受けているため、全体の形状は明らかでない。断面形は、検出面から中位までは幅狭になり、下部はやや広がる。ただ、西側の狭い部分は、地山面が一段

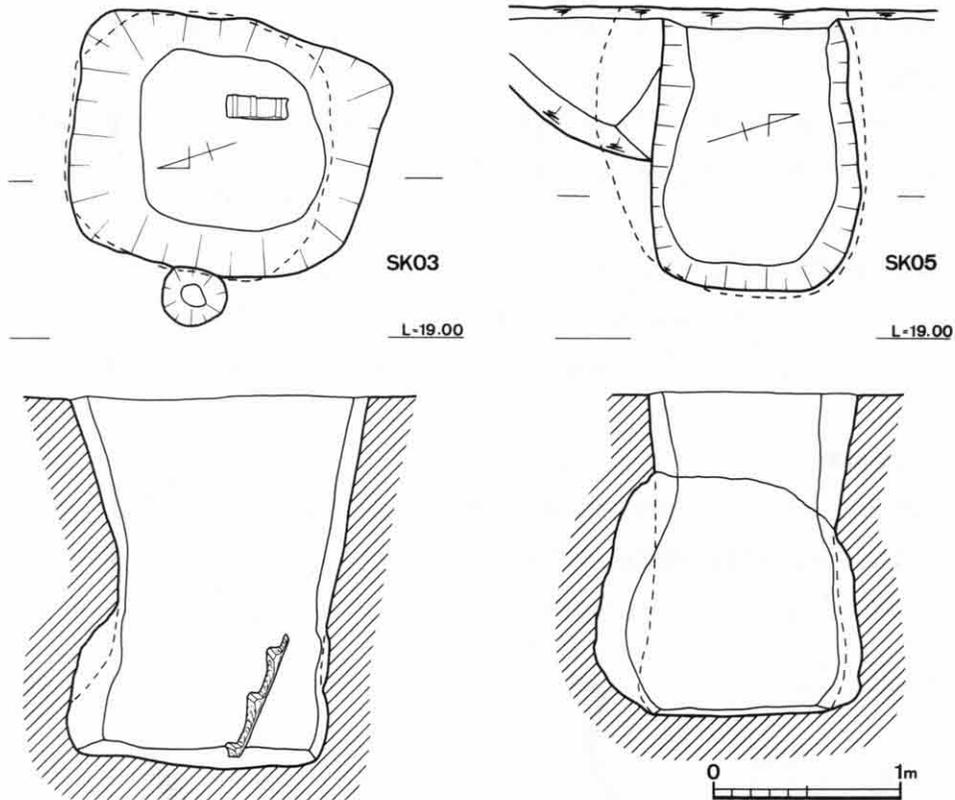
低くなっており、細い通路状の施設を有する。

覆土の状況は、検出面付近においては、地山土の汚れた土がゆるやかなレンズ状に堆積している。これより下層は、ほぼ均一な黒褐色粘質土で占められる。

遺物は、最上層でややまとまって土器片が出土したが、その他は少なく、底面近くで鉢が1点出土したほかには若干の小片があるのみである。また、ここでは木製品が4点出土している。斧柄・鋤柄・杭・不明柄があり、いずれも底面から若干遊離した状態であった。

#### 土坑3

平面形は、ややびつな隅丸長方形を呈する。断面形は、検出面から下方に向かって幅

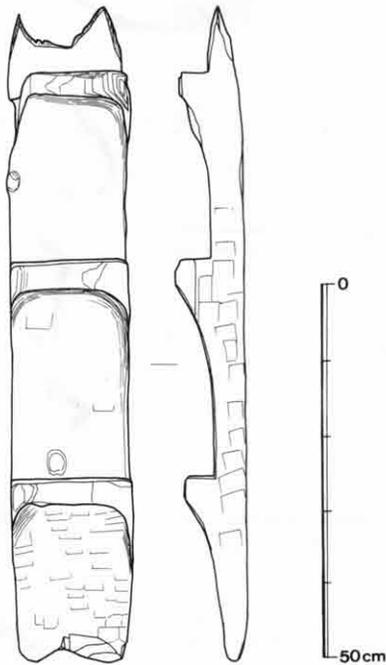


第3図 SK03・05 実測図

が狭くなり、底部付近でやや広がっている。底面はほぼ平坦な面をなす。

覆土の状況は、検出面付近で地山土がブロック状に混じる黒色土がレンズ状に堆積している。これ以下については、土坑1と同様に均一な黒褐色粘質土で占められる。遺物は、弥生時代後期の土器片が大量に出土したが、特に集中することはない、全体に含まれている状況である。

また、この土坑では、坑底において木製のはしごが、粘質土の地山面に突きたてられた状況で残存していた。位置的には、土坑中央ではなく、やや東寄りであり、南側上方にむかって約70°の傾きをもっている。掘形等はない。はしごは、下端部から3段分が残っており、上端は腐食している。傾きについ



第4図 SK03 出土はしご実測図

ては若干考慮する必要があるが、使用時の状況をとどめているものと判断できる。

### 土坑 5

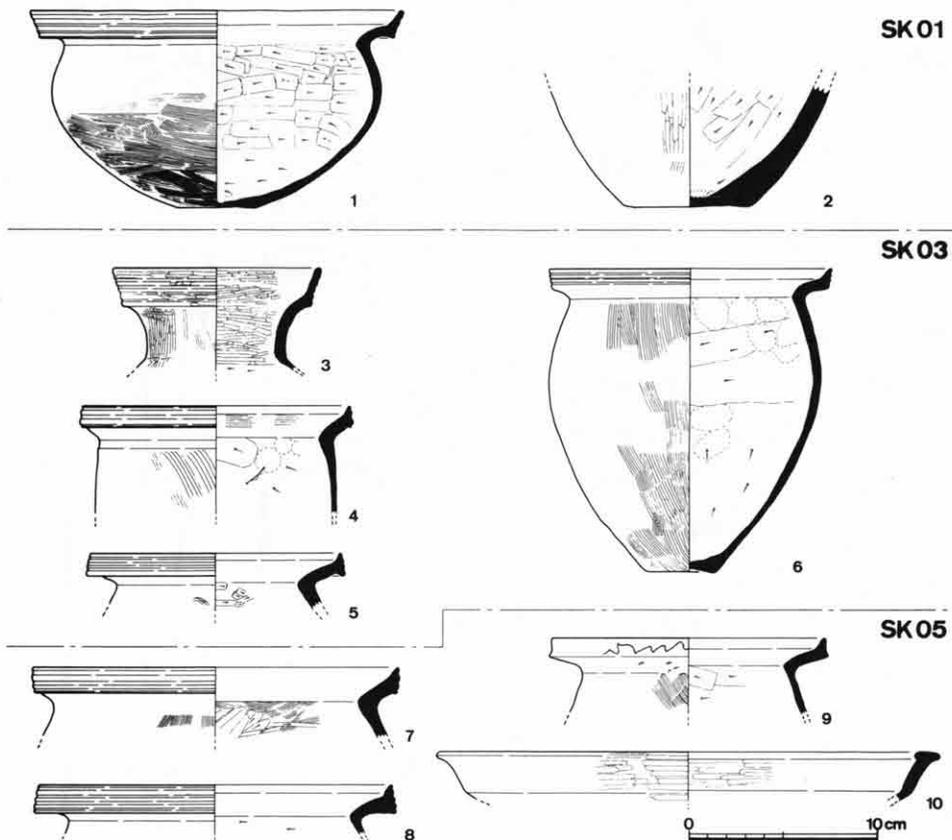
平面形は、隅丸長方形を呈するが、西側はトレンチ外であり全形は不明である。断面形は、土坑 3 と同様、下方に向かうほど狭くなり、中位以下はやや広がっている。底面は、ほぼ平坦な面をなす。

覆土の状況は、土坑 3 とほぼ同様な状況にある。検出面付近にある地山ブロックを含む層以下は、ほぼ均一的な黒褐色粘質土が堆積している。

ここでは全体を通じ出土した土器量は少なく、弥生時代中期から後期の土器片が若干出土している。

### 土坑の時期

それぞれの土坑からは、弥生時代後期の土器が出土している。各土坑から出土した土器は、後期でも中段階に属し新段階以降の土器を含まない。このため各土坑は、後期後半から末頃にはすでに埋没しておりその機能を停止している。



第 5 図 土坑出土土器実測図

土坑法量表

	検出面 (cm)	深さ (cm)	坑底部 (cm)	坑底面積	容積	平面形
SK01	(198以上)×156	184	132×110	1.16m <sup>2</sup>	約2.65m <sup>3</sup>	とっくり形
SK03	160×135	212	143×135	1.68m <sup>2</sup>	約1.68m <sup>3</sup>	隅丸方形
SK05	(150以上)×110	170	(154以上)×12	1.71m <sup>2</sup>	約2.89m <sup>3</sup>	隅丸方形?

### 3. ま と め

以上、今回検出した土坑についての概要を報告したが、最後に3基の土坑のもつ共通要素をまとめてみる。

形態上の特徴としては、深く縦掘りされている点<sup>(注1)</sup>があげられる。しかも、土坑壁面はほとんど凹凸がなく、掘削にあたっては<sup>(注2)</sup>はていねいな造作が行われているものと判断できる。

土坑内覆土の状況では、上面近くまでのほとんどが黒褐色粘質土で占められている点がある。このことから、各土坑とも掘削された後すぐには埋め戻されることなく、徐々に自然埋没していったものと理解できる。

次に、これら土坑の集落内での位置についてであるが、同時期の住居跡が調査地内では検出できなかったため、住居域との有機的関係は不明である。しかし、土坑内の土器・周辺攪乱層中の土器量、段丘上での位置などから見て、すぐ周辺に住居域のあることは、十分推定できる。しかも、<sup>(注1)</sup>時期的にはほぼ併行するものとみられる3基が、ごく近接した位置にあり、小規模な集落単位での共同管理といった状況も想定しうる。

また、今回の土坑と類似した遺構として、石川県竹生野遺跡<sup>(注1)</sup>をはじめ、石川県を中心として北陸地方に例の多い「大型土坑」<sup>(注2)</sup>がある。深く縦掘りされた形態・平面形、時期、集落内において、数基～10基程度の群をなすという状況等本例との共通性は高いものと言える。中でも、坑底施設の「中央ピット」を理解する上で、今回の土坑3におけるはしごの出土状況はひとつの実例を示すものと言えるのではなかろうか。

今回検出した例は、丹後地域においてはもちろん初めてといえ、当地域における貯蔵形態を考える上で貴重な例といえる。

(もり・ただし=当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 越坂一也・三浦純夫他『竹生野遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1988

注2 三浦純夫「大型土坑の機能について——能登半島の弥生時代を中心として——」(『竹生野遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター)1988



SK03はしご出土状況(東から)

資 料 紹 介

福知山市興遺跡出土の簪について

——弥生時代簪の一事例——

田 代 弘

1. はじめに

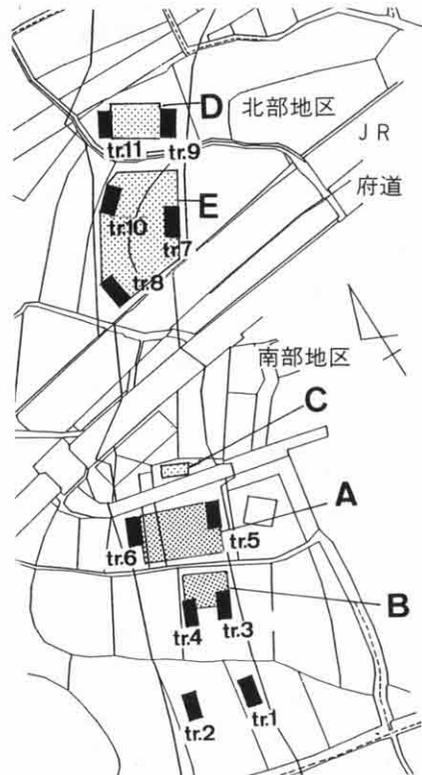
当調査研究センターでは、現在、近畿自動車道敦賀線建設に先立って福知山市興遺跡の発掘調査を実施している。先日、この遺跡から弥生時代中期の土器とともに木製の簪が出土した。簪は、装身具のひとつで、頭飾りとして用いられたものである。弥生時代の頭飾りには簪のほか、竪櫛やガラス製玉飾り、耳飾りと思われるもの、ヘアバンドなど各種が知られているが、概して出土例に乏しい。弥生時代の簪は数例知られるのみであり、今回確認した事例は貴重な追加資料となるものと思われる。そこで、小稿では出土状況と観察所見を中心に述べ、あわせて気付いた事柄を記しておきたい。

2. 遺跡と調査の概要

興遺跡は、福知山市字興～観音寺に所在する。由良川によって形成された沖積地の縁辺部に位置し、自然堤防状の微高地に立地している。この遺跡は、昭和20年に興小字上地で行われた道路工事に際して台付無頸壺が発見され、弥生時代中期の集落跡として注目されるようになり、その後の分布調査等で複合集落遺跡であることが判明した。<sup>(注1)</sup>

今回の調査地は、興遺跡推定範囲の南東部で、同じく弥生時代中期の遺跡として著名な観音寺遺跡<sup>(注2)</sup>に隣接する地点にあたる。

調査地は、府道とそれに並行して敷設されているJRによって南北に二分されている。そのため、大きく南部地区と北部地区の2つの調査地区を設け、南部地区ではA～Cの3拡張区、北部地区ではD・Eの2拡張区、あわせて5つの拡張区を設けて調査にあたった(第1図)。調査の結果、南部



第1図 興遺跡トレンチ配置図

地区では上層において鎌倉～室町時代の遺構群を、下層において弥生時代中期の遺構群を検出した。北部地区は現在調査中であるが、弥生時代中期の土壙群、大溝等を検出しつつある。調査の経過等は、本誌32号に略報を掲載しているので参照されたい。

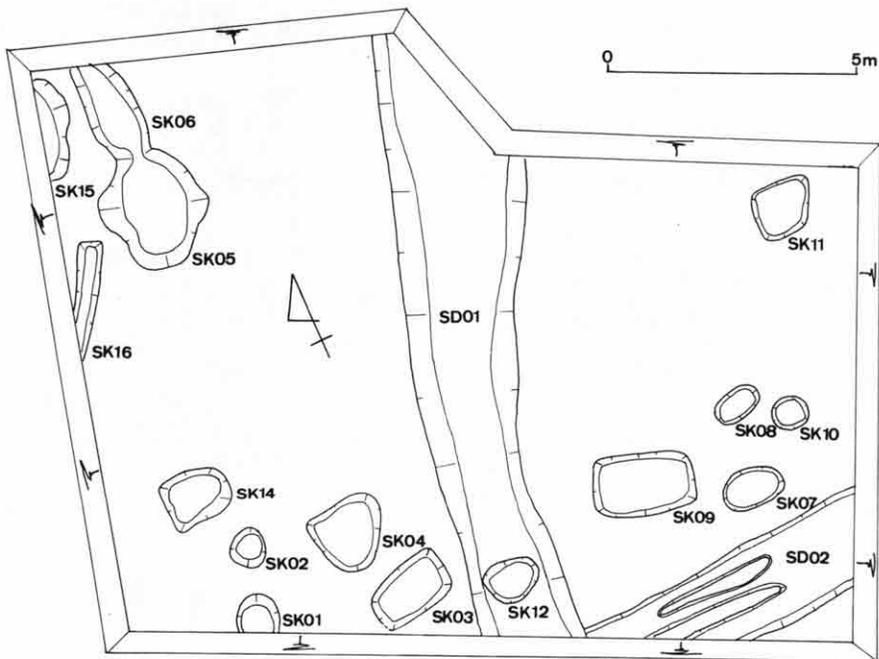
簀は、北部地区のD拡張区において検出した。

### 3. 出土遺構と遺物

D地区では、3条の溝と14基の土壙群を検出した(第2図)。いずれの遺構も埋土に弥生時代中期後半(第Ⅳ様式)の土器を含んでいた。土器は、細片化したものが大半を占め、破断面が磨滅しているものが数多く認められる。

簀は、これらの遺構のうち、SK09(第4図)と名付けた土壙において検出した。

SK06は長さ約2.1m・幅約1.3m・深さ0.4mの長楕円形の土壙で、地山の青灰色粘土層を穿って造られたものである。主軸は東西方向で、壁面はほぼ直立しており、底面もほぼ平坦に造られている。埋土は、地山粘土混じりの暗灰色粘質土を主体とし、下層には黒色の有機質土がみられた。簀は、北東寄りの地点でこの黒色土層中より出土した。SK09からは、他の遺構同様、弥生時代中期後半の壺、甕、高杯などの小破片が伴出している。SK09出土土器は細かく図化が難しいため、参考資料として他の土壙出土遺物を図示して



第2図 D地区検出遺構実測図

おく(第5図)。

簪は、頭頂部が欠損しているほかは残りがよく、器体も安定していて使用当時の姿をよくとどめている。黒色の板状素材を用いており、2本の脚と頭部を削り出して形成している。形成後、ていねいに研磨しているようで、器体は平滑で丸みを帯びている。頭部は断面が楕円形の小さな三角形を呈しており、頂部にむかって細くなる。当例では、この細くなった部分で破損しているため頭頂部の形状は明らかでない。素材の違いはあるが、広島県広島市中山遺跡や島根県仁摩郡仁摩町坂難遺跡<sup>(注3)</sup>などでは、頭頂部に抽象的、または具象的な装飾部を有している。当例もこれらと同様に何らかの装飾が施されていたと推察される。脚は、末端に向かってややすぼまりながら直線的にのびる。断面形は隅丸の方形である。

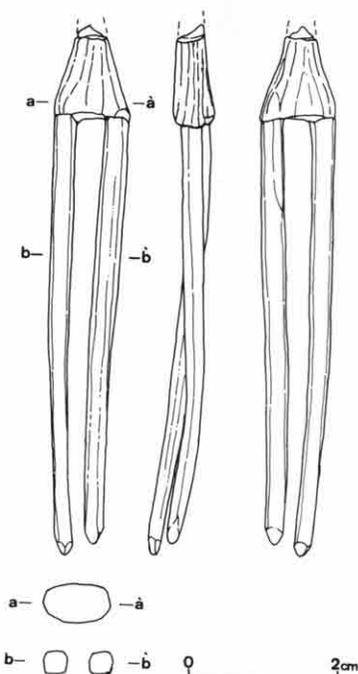
現存全長約7.0cm・頭部現存長約1.2cm・脚部長約5.8cmを測る。頭部幅約0.9cm・厚み約0.6cm・脚部の厚みは約0.3cmである。

なお、素材については、器体主軸に平行して木目状の組織が認められることから、現在のところは木材と考えている。器表、断面が漆黒色を呈しており、他の素材である可能性もあるので、今後、自然科学的分析も含めて検討していきたい。

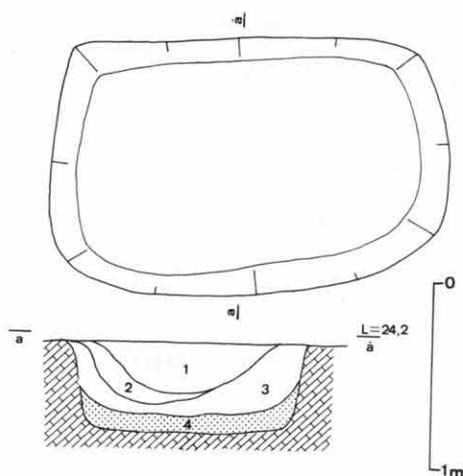
#### 4. おわりに

今回報告した簪は、出土状況や共伴遺物等からみて弥生時代中期後半(第Ⅳ様式)に製作、廃棄されたものとする事ができる。

弥生時代の頭飾りを集成・検討した木

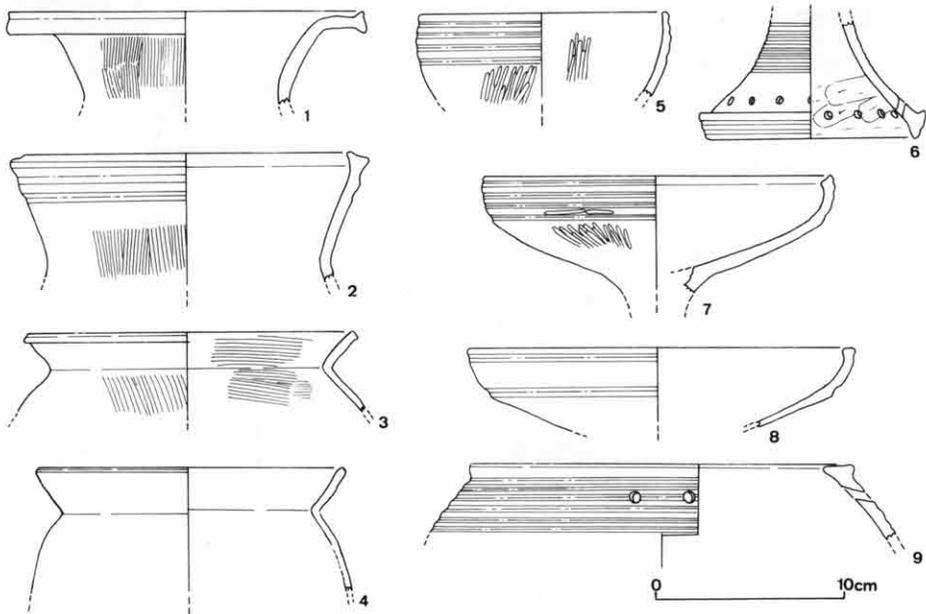


第3図 簪実測図



第4図 SK09 実測図

1. 黄色粘質土
2. 暗灰色粘質土
3. 暗灰色粘質土(黄色粘土ブロック混じり)
4. 黒色粘質土



第5図 D地区各土壙出土土器実測図

下尚子氏によると、弥生時代の簪は現在のところ5遺跡で8点が確認されていたにすぎない。時期は、弥生時代前半期(第Ⅰ様式～第Ⅱ様式)に集中する傾向があるようだ。堅櫛同様、その多くは、縄文時代の諸例のうちに意匠を見出せることから、縄文時代の習俗の継承と考えることができるとしている。素材も骨・鹿角製のものと木製の両者があるが、前者が卓越する点もこのことを裏付けている<sup>(注4)</sup>。

当例は、弥生時代中期後半に属することを確実にすることができることから、弥生時代の簪では最も新しい例と位置づけられるかもしれない。木下氏の集成された諸例について出土状況をみると、包含層出土例が大半を占めているが、当例は共伴遺物に恵まれなかったとはいえ土壙底から出土しており、出土状況が明確な事例としても注目に値する。

いずれにせよ、当例は、簪資料の貴重な追加事例となった。

(たしろ・ひろし=当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1 『福知山市史』第1巻 福知山市役所 1976

注2 梅原末治「西中筋村石剣発見ノ遺跡」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第3冊)1922 現在調査継続中

注3 木下尚子「頭飾り」(『弥生文化の研究』8 雄山閣)1987を参照した。

注4 注3と同じ

注5 注3と同じ

## 資料紹介

## 私市円山古墳出土の円筒埴輪

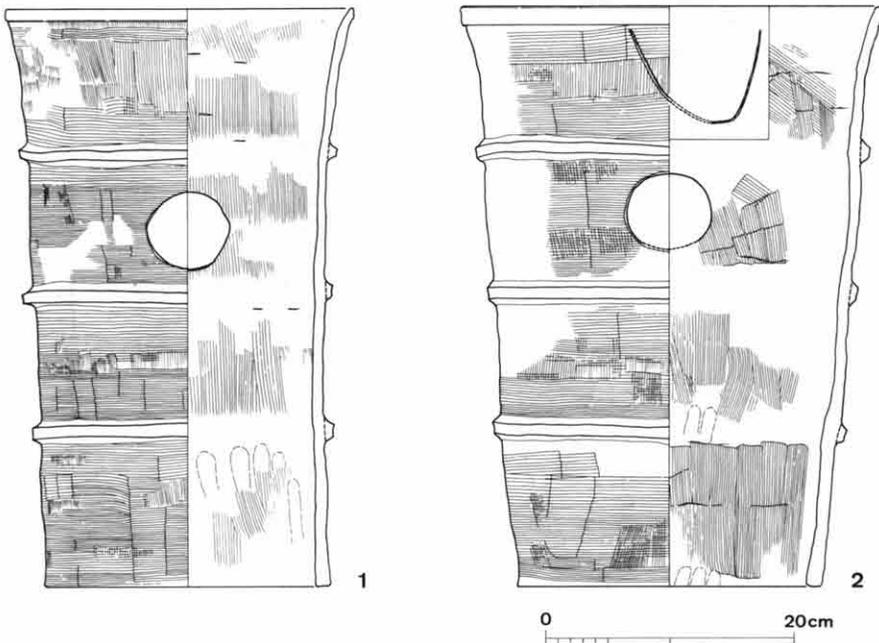
鍋田 勇

## 1. はじめに

京都府綾部市に所在する私市円山古墳の出土遺物について、これまでに胡籙金具・甲冑の紹介を行ってきた。今回は、本シリーズの最後として、円筒埴輪を取り上げる。

## 2. 円筒埴輪の観察

私市円山古墳では、墳丘を取り巻く2つの埴輪列および造り出し部から、調査範囲内において約170本の原位置を保つ円筒埴輪(朝顔形を含む)を検出した。その多くは、上半部が破損・流失し、底部(第1段)から第2段にかけて遺存するのみであった。第1図は、全容を知り得た2個体の円筒埴輪である。1・2とも第Ⅱ埴輪列に樹立されていた。



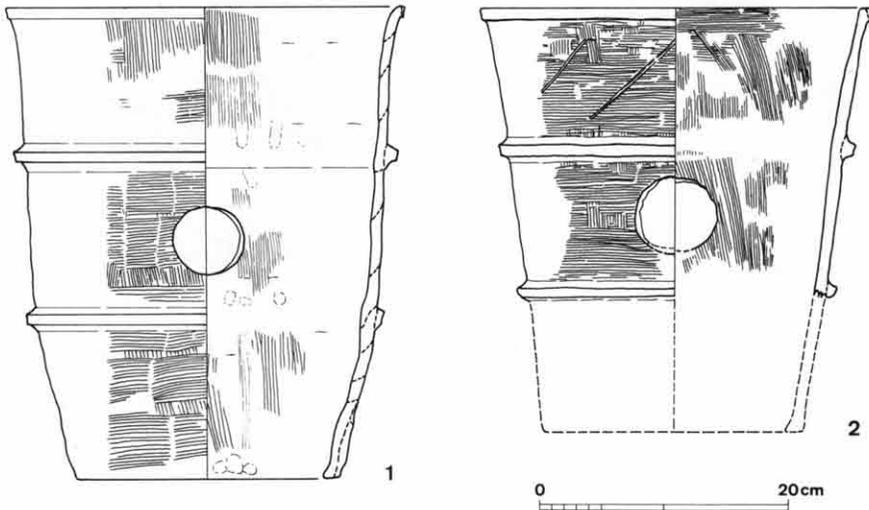
第1図 私市円山古墳出土円筒埴輪実測図 (scale=1/6)

**形態の特徴** 3つのタガをもち4段で構成される。全体のプロポーションとしては底部から口縁部まで直立気味に立ち上がるが、口縁部はゆるやかに外反している。1は、器高46.5cm・口径28.0cm・底径22.4cm、タガ間の長さ約9cmを測る。口縁端部の形状は特徴的であり、2ではわずかに端部を外側に折り返し、明瞭な段を形成する。1では、手法は異なるもののナデにより類似した口縁端部となっている。口縁端部と第3タガまでの長さは、他のタガ間の長さと同じことから、タガとは明らかに形態を異にするものの、この端部は見かけ上では4番目のタガという印象を与えている。タガは、断面形が台形を呈するものと、わずかにM字状に窪むものとがみられるが、きわだった差はない。ナデによりていねいに仕上げている。透孔は、円形で、第3段に2孔穿たれる。他では、第2段に穿たれるものもあり、朝顔形埴輪では半円状の透孔も認められる。なお、2では4段目に「U」字状のへら記号が描かれている。焼成は良好であり、1は青灰色を呈する須恵質、2は淡黄褐色を呈してはいるが、須恵質に近い焼成である。

**内外面の調整** 外面は1次調整にタテハケ、2次調整にヨコハケを施す。ヨコハケは、器壁上で工具を停止する手法で、川西氏の分類によるB種ヨコハケである<sup>(注1)</sup>。外面のヨコハケは第1段から第4段にまですべて施されている。内面は、ナデおよびタテハケを施す。全体的にていねいな調整がなされている。

### 3. 中坂古墳群と福垣北古墳群

以上に紹介した円筒埴輪と類似した特徴を有する埴輪が、当古墳の周辺に位置する古墳



第2図 円筒埴輪実測図 [1. 中坂2号墳 2. 福垣北7号墳] (scale=1/6)  
(注2・3文献より転載)

群内からも出土している。福知山市宇土に所在する中坂2号墳<sup>(注2)</sup>と綾部市豊里町に所在する福垣北7号墳<sup>(注3)</sup>である。以下、両古墳と出土した円筒埴輪について略説する。

**中坂2号墳** 南北約12m、東西約8.4mを測る方墳である。箱形木棺内から直刀1、刀子1、長頸鏃5が出土している。円筒埴輪は、周溝内から合計4個体分が出土している。第2図の1はそのうちの1点である。2つのタガを持ち3段で構成される。底部から上はほぼ直立気味に立ち上がる。口縁端部には外側に折り返した段を有している。外面調整は、タテハケのちB種ヨコハケを施す。内面は、タテハケのち一部にナデを施す。黒斑はなく、須恵質に近い焼成である。色調は淡黄褐色を呈する。

**福垣7号墳** 約9m×11m程度の楕円形の古墳である。墳丘・主体部とも削平されていたため詳細は不明である。円筒埴輪は周溝内から出土している。第2図の2はそのうちの1点である。図のものは底部を欠くが、同時に出土した他の例から2つのタガをもち3段で構成されることがわかる。底部から口縁部にかけて開き気味に立ち上がる。口縁端部外面に段を有する。外面の調整は、タテハケのちB種ヨコハケを施す。内面は、口縁部付近にのみ一部ヨコハケを他はタテハケを施す。黒斑はなく、須恵質に近い焼成である。色調は淡黄褐色を呈する。

#### 4. おわりに 一埴輪祭祀の継承—

私市円山古墳出土の円筒埴輪と、周辺古墳から出土した類似する2点を紹介した。以上の3古墳出土の円筒埴輪を通じて注意される点を次に記し、まとめたい。

①3古墳の埴輪に共通した要素として、特徴的な口縁端部の形態・内外面における調整技法・焼成をあげることができる。とくに中坂2号墳出土の円筒埴輪は、私市円山古墳出土のものとの区別がつかないほどきわめて似ている。

②異なる要素としては、私市円山古墳が4段であるのに対し、他の2古墳のものは3段で構成されている点をあげ得る。

③時期的には、いずれも川西編年のⅣ期に属する。しかし、各個体の調整を詳しく比較すると、福垣北7号墳の円筒埴輪の外面調整に見られるヨコハケは、やや粗雑なものであり、同古墳出土の他例では、底部に外面ヨコハケを施さないものも見られる。全体の形態も底部から口縁部にかけての外反傾向が強くなる。この点を重視すると、私市円山古墳・中坂2号墳→福垣7号墳という流れが認められる。

さて、①～③を積極的に評価すると次のような想定が可能であろう。

中丹地域の中では、菖蒲塚・聖塚古墳でまず埴輪が採用され、続いて私市円山古墳に埴輪が採用される。しかし、前者の埴輪が黒斑を有するのに対し、後者では須恵質の埴輪を

有していることから、窯による焼成は私市円山古墳においてはじめて導入されたと考えられる。当古墳の大量の埴輪を製作するにあたっては、中丹地域内において埴輪製作に関わる工人集団を編成する必要があったと考えられ、また、その指導者を畿内から迎えることにより大量生産を可能とする窯による埴輪の焼成が実現したとみることができる。

古墳築造後は、この工人集団は解体するが、私市円山古墳の傘下とでもいべき小地域首長もしくはその首長を支える集団内においては、埴輪の製作技術を保持し、埴輪祭祀を引き続き行うことが可能であったと考えられる。中坂古墳群・福垣北古墳群を築造した集団は、このような性格を有していたものと考えられるのではないだろうか。②に記した私市円山古墳と中坂2号墳・福垣7号墳にみられる埴輪の段数の違いは、この場合、若干の時期的な差とともに、古墳規模からもわかるように階層の差を反映していると解釈ができる。大古墳の築造を契機として採用された埴輪祭祀が、埴輪製作技術を保持し得た集団によって、小規模古墳へと受け継がれていくひとつのありかたがここに認められよう。

(なべた・いさむ=当センター調査第2課第2係調査員)

注1 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2)1977

注2 末本信策・平良泰久「中坂古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1972)』京都府教育委員会)1972

黒田恭正・杉本宏「中坂古墳群・他」(『丹波の古墳』I 山城考古学研究会)1983

中坂2号墳については、安藤・平良両氏に事実関係についての御教授を得た。また、埴輪の実見に際しては、京都府立丹後郷土資料館において安藤氏にお世話になった。記して感謝します。

注3 石井清司「福垣北古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1988

田代 弘「福垣古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第30号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1988

福垣北古墳7号墳については、石井・田代両氏に事実関係についての御教授を得た。

## 新 刊 紹 介

## 福知山高校資料室収蔵品目録 —考古資料編—

『福知山高校資料室収蔵品目録—考古資料編—』は、京都府立福知山高等学校に、収蔵されている、多量の考古資料の目録で、1989年3月に刊行された。創立90年をむかえ、伝統ある福知山高等学校(以下、福高と略す)には、貴重な考古資料などが数多く集められていることは、つとに知られていたが、このたびこのような立派な目録が上梓されたことは、まことに喜ばしいことである。まずは、資料の収集・保管ならびに目録刊行にあたられた、福高関係者、同校同窓会など関係各位の御尽力に深く敬意を表したい。以下、簡単に同資料及び目録の紹介を行いたい。

福高の考古資料は、福高の関係者(生徒・卒業生・父兄・教員)によって、主に1945年以降に収集、寄贈されたものである。収蔵品は、土器を中心に、縄文時代から江戸時代の各時代・各種類にわたり、採集地域も、福知山市・綾部市から丹後・但馬地方をはじめ、遠く九州・関東・北海道にまで及んでいる。これらの考古資料は、採集地・採集年月日・採集者がきちんと記録されているものが多く、資料的価値が高いものである。また、これらの資料が永く保存され、大切な教材・資料として活用され続けていることも特筆されるだろう。

この目録は、考古資料の概要・資料目録(杉原和雄・田代 弘両氏執筆)を中心とするが、原始・古代の福知山(杉原和雄氏執筆)、中・近世の福知山(川端二三三郎氏執筆)と、『奉安塚発掘の記』(1950年刊)の復刻、奉安塚古墳出土金属器の保存科学処理(橋本清一氏執筆)、関係略年表・関係略地図(川端二三三郎氏執筆)なども収められており、主として高校生を対象とした記述になっている。特に資料目録は、60頁にもわたる大部かつ詳細なものである。各考古資料は、丹波・丹後・他府県など出土遺跡・出土地ごとに分類され、精巧な写真・解説・実測数値・員数・採集地・採集年月日・採集者・遺跡の概要・関係文献などが付されており、大変役に立つ労作である。

この資料の圧巻は、福知山市宇報恩寺の佐賀小学校裏山に所在した奉安塚古墳出土の一括資料である。同古墳は、1949年4月福高社会部が発見、同年5月から7月、同じく福高社会部により発掘調査された後期古墳である。内部主体は、長さ4.2m以上・幅1.75mの無袖式横穴式石室で、仿製鏡・ガラス製勾玉・金環・鋏・鉄刀・刀子・鉄鏃・馬具・砥石・鉄釘・須恵器・土師器など豊富な遺物が出土し、6世紀後半に築造、7世紀まで追葬さ

れたと考えられている。とりわけ、鞍飾金具・鏡板・杏葉・辻金具・革金具・雲珠などの馬具は、金銅装の立派なもので、後期古墳の馬具の基準的な資料として著名である。したがって、この古墳出土の一括資料は、京都府の古墳文化を考える上で、極めて貴重なものである。またこれら馬具などの金属製遺物は、1987年度に、京都府立山城郷土資料館にて、錆止め・強化などの保存科学処理が施されており、保存状態も極めて良好である。さらに、1950年に福高社会部考古学班によって、奉安塚古墳の調査報告書として刊行された、『奉安塚発掘の記』の復刻が所収されているが、同書は現在では入手が困難なだけに、この目録の価値をなお一層高めている。

そのほか、この目録から注目すべき遺物の一端を挙げると、興遺跡(福知山市字興)出土の台付壺は、この地域の弥生時代中期の貴重な資料であり、東光院窯跡(綾部市上延町)出土の土器・窯壁は、奈良時代後期の生産遺跡の資料として重要である。また、上野平遺跡(福知山市字石原)出土の陶器は、平安時代～鎌倉時代の蔵骨器である可能性が高く、福知山市字天田小字釜戸出土の陶器一括資料は、江戸時代の藩の窯跡もしくは民間窯跡の存在を示している。

このように、それぞれ一見の価値のある遺物を多く含む福高考古資料の目録が、専門家の手によって上梓されたことは、丹波地方、ひいては、京都府の歴史や人々の暮らしを考えるうえで、大変有益なことであり、同学諸氏の必携の書になることであろう。また、これらの収蔵品や写真原板は新築された福高郷土資料室に大切に保管されており、いつでも希望者は、見学・活用することができる。最後に、この目録の持つ意義と関係者の御努力を再び強調して拙い紹介を終えたい。

なお、この目録は福知山高等学校で、希望者に実費にて頒布されている。

(磯野浩光)

B5判、本文72頁・カラー図版4頁・付載25頁、  
京都・京都府立福知山高等学校、1989年3月刊

## 府下遺跡紹介

## 44. 天智天皇山科陵

山科陵は、天智天皇の陵墓として京都市山科区上御廟野町に所在している。この古墳は、現在は宮内庁の管轄下にあつて見学することはできないが、被葬者が确实と思われる数少ない古墳の一つである。

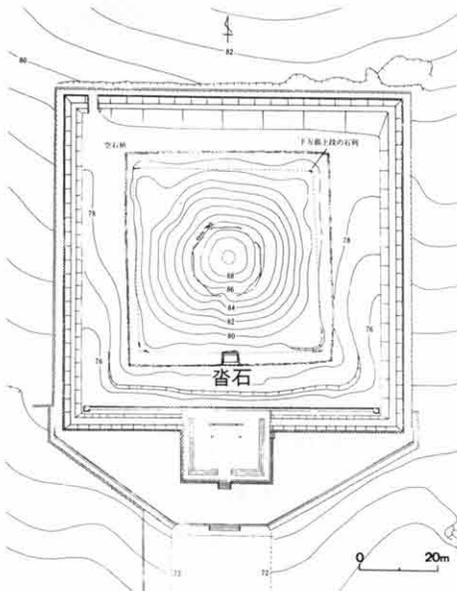
古墳の被葬者である天智天皇は、いわゆる大化のクーデタを断行し権力を握った専制君主で、敵対者を葬ってきた。しかし、その死後に壬申の乱が起こり、天武方が勝利して実子の大友皇子に皇位を伝えることができなかった。特に、その死に際して皇太弟の大海人皇子(天武天皇)を吉野に引退させ、壬申の乱の原因になるなど、『日本書紀』天智紀にはかなり具体的に記述されている。

天智紀によれば、天智10(671)年12月3日条に「天皇崩于近江宮。」とあるように、近江宮で崩じたことがはっきりしている。また、翌天武元(672)年五月是月条に「朴井連雄君、奏天皇曰、臣以有私事、独至美濃、時朝廷宣美濃、尾張、两国司曰、為造山陵、予差定人夫、則人別、令執兵、(下略)」とあるように、翌年の5月には山陵を造るために人夫が徴発されていることがわかる。日本古典文学大系本の注釈では、『続日本紀』文武3(699)年10月条を引用して、天智陵が完成しなかったように推定している。確かに壬申の乱もあり、完成が遅れたことは想像されるが、文武3年段階まで完成しなかったとは考えにくい。それは、同じ文武3年10月条に「詔赦天下有罪者、但十惡強竊二盜不在赦限、為欲營造越智、山科二山陵也」とあり、山科陵だけではなく、

齋明天皇の越智山陵の名も見えることからいえるよう。越智山陵は、天智5(666)年2月27日条に「合葬天豐財重日足姬天皇与間人皇女於小市岡上陵」と見えるように、天智5年頃には完成していたとみられる陵墓である。この陵墓と山科山陵が同時に文武3年に「營造」されているのであるから、これは修造もしくは改葬と解釈するのがよからう。事実、『続日本紀』文武3年10月20日条には、各山



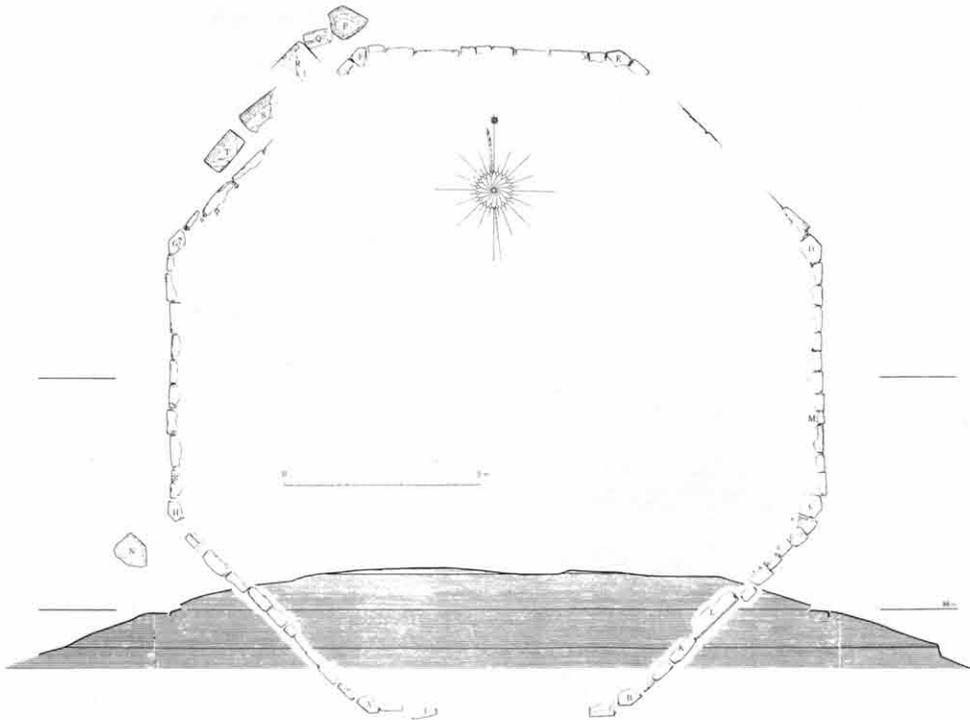
第1図 遺跡所在地 (1/50,000)



第2図 山科陵平面図（笠野論文より転載）

陵へ派遣される人物が書かれたあとに、「並分功修造焉」とあって、このときの「营造」は「修造」であったことがわかる。おそらく、地位の高い人物が工夫らとともに派遣されていることから、このときかなり大規模な修理が行われたと推定される。

このように、天智天皇は、天智10年12月3日に近江宮で崩じた後、翌天武元年5月頃には山陵の工事が本格化しかかっていたと推定してよかろう。ただ、『日本書紀』には陵墓をどこに設けたかは記載がない。しかし、先の『続日本紀』文武3年10月条には「山科山陵」とはっきりみえることから、近江宮で崩



第3図 八角墳丘部実測図（笠野論文より転載）

じ、そこで殯が行われ、天武初年頃には山科の地に葬られたことは疑う余地がない。ところが、天智の死に関しては『帝王編年記』に不思議な記事が載せられている。それには、「或日、天皇駕馬、幸山科郷、更無還御、永交山林、不知崩所、以御沓落所為其陵、」とあり、山科に行幸して山林に入って行方不明になったため、沓が脱げ落ちていたところを陵墓としたとしている。もちろん、これは伝承であり、全く事実と反している。しかし、それにしても、このような伝承が成立したことは、天智系の皇統が復活してから天智天皇への畏敬などがその根底にあったとみるのがよからう。

次に、山科陵の規模であるが、まずその兆域は、『延喜式』諸陵寮の山科陵のところに、「近江大津宮御宇天智天皇、在山城国宇治郡、兆域東西十四町、南北十四町、陵戸六烟」と見え、天武・持統合葬陵の兆域「東西五町、南北四町」と比較しても、かなり大きな兆域を持つことがわかる。むしろ、これは実際の古墳の規模を表したのではなく、事実この二つの古墳の規模はそれほど異ならない。それにもかかわらず、山科陵の兆域が広いのは、後世の天智天皇の位置づけと関係するようである。実際の規模は、方形の部分で一辺約46mを測る。

墳形は、上円下方墳と言われていたが、上円部が実際は八角形であったことが、近年の調査によって確認された。この八角部墳頂平坦面外縁の法肩から1～3m外に花こう岩の切り石を並べた石列があり、それを結べば等角の八角形になっていることがわかる。すなわち、各辺が真東西・南北方向と45度の角度をとるように並べられ、包囲を真南北にとるといふ、終末期古墳に特徴的な造営方法を採用している。また、八角形部の頂部には、かつて八角円堂があって応仁の乱で焼失したことが『山州名跡誌』にみえている。この円堂の性格はよくわからないものの、八角形の形態は後世までかなり意識されていたとみてよからう。

八角形の墳丘を持つ終末期古墳としては、舒明天皇陵、天武・持統合葬陵、中尾山古墳などがある。いわゆる上円下方墳で、上円部が八角形を呈するものは、舒明陵とこの天智陵だけである。八角形墳が主として天皇陵に用いられたことは、この墳形の持つ思想性がうかがわれよう。従来は、主として、仏教思想に基づく八角堂との関係を主張する説と、道教思想に基づくとする説のふたつに分けられるが、現在ではいずれとも決めがたい。ただ、明確な根拠はないが、中国の明堂が八角形の壇を持つこと、天皇が朝賀のときなどに入る高御座が八角形をしていることなどから、道教思想に基づく礼の秩序と関係があるようにみえる。むしろ、先の墳頂部にあったといわれる八角円堂の性格が明らかではないので、必ずしも確実なものとはいえない。

なお、八角形の列石に接して、南辺中央のテラス上に「沓石」と称する3m×2mの花

こう岩の一枚石がある。調査者は、この沓石を礼拝石とする説を紹介している。礼拝石説は、古く蒲生君平が『山陵志』の中で「奉幣使宣命之処也」とするのにはじまる。現時点では、この説がもっとも可能性があるが、今後の八角形墳の位置づけや性格が解明されることによって、もっとはっきりとしてくるであろう。 (土橋 誠)

〈参考文献〉

蒲生君平『山陵志』

谷森善臣『山陵図考証』

菅谷文則「八角堂の建立を通じてみた古墳終末時の一様相」『史泉』40 1970

網干善教「八角方墳とその意義」(『橿原考古学研究所論集』第五 吉川弘文館)1979

笠野 毅「天智天皇山科陵の墳丘遺構」『書陵部紀要』39 1988

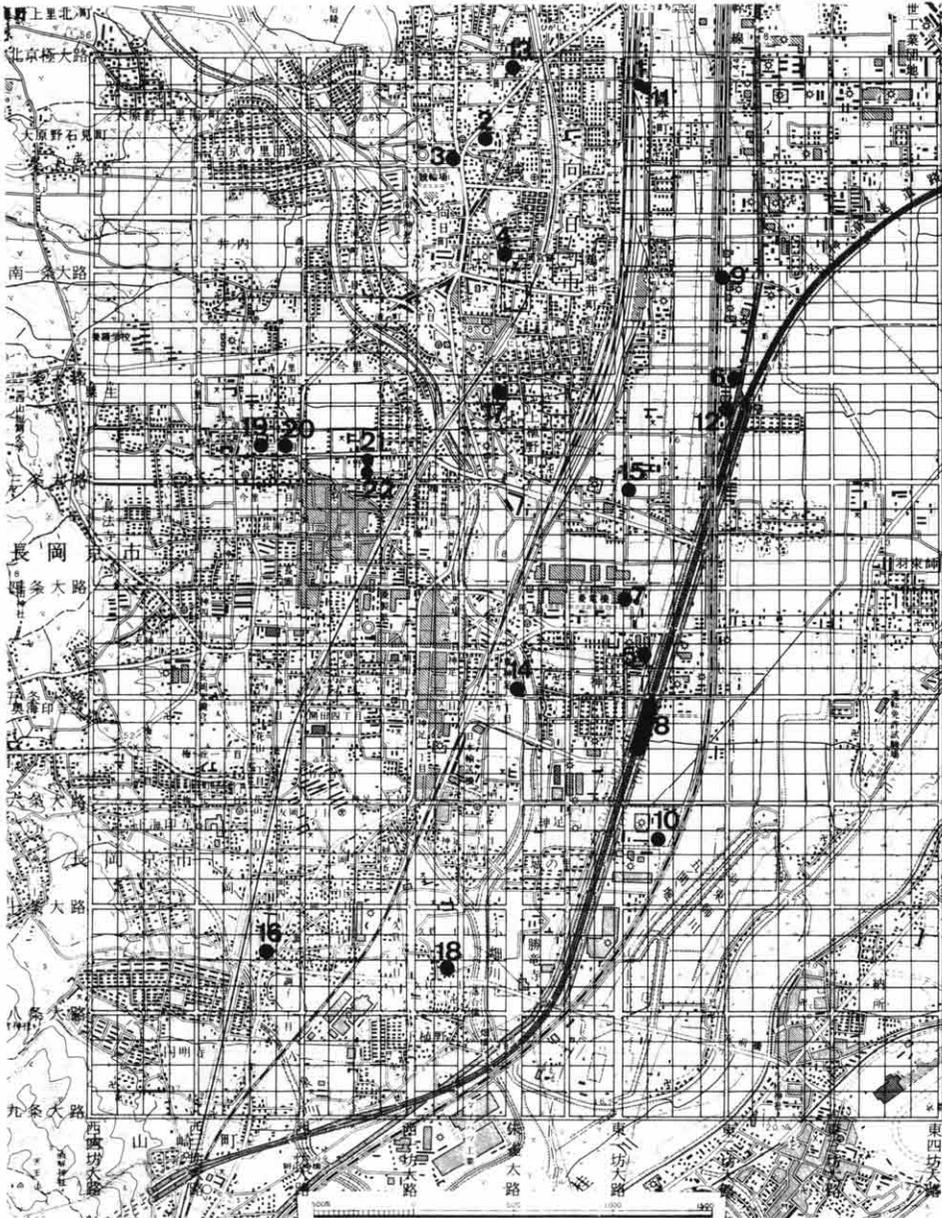
『飛鳥時代の古墳』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979

## 長岡京跡調査だより・30

平成元年5月24日・6月28日・7月26日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域4件、左京城11件、右京城7件の計22件であった。これら22件の調査地は、位置図・一覧表のとおりである。このうち、主なものいくつかについて、調査成果を簡単に紹介する。今回は、左京城に集中する。

調査地一覧表 (1989年7月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内226次	7AN11N	向日市寺戸町初田19-3	(財)向日市埋文	5/10~6/13
2	宮内227次	7AN12I	向日市寺戸町西野辺25	(財)向日市埋文	5/22~7/5
3	宮内228次	7AN17C	向日市寺戸町西野辺1-10・11	(財)京都府埋文	7/3~7/26
4	宮内229次	7AN9S	向日市鶏冠井町大極殿26-8	(財)向日市埋文	7/10~7/24
5	左京212次	7ANMYB	長岡京市神足神田15	(財)長岡京市埋文	3/15~5/20
6	左京214次	7ANEGZ-2	向日市鶏冠井町極楽寺27・28	(財)向日市埋文	4/3~6/11
7	左京215次	7ANIKC-2	長岡京市馬場北石ヶ町1-1	(財)長岡京市埋文	4/1~
8	左京216次	7ANMTD-2 他	長岡京市神足他	(財)京都府埋文	4/4~
9	左京218次	7ANEHD-2	向日市鶏冠井町七反田14-1	(財)向日市埋文	4/17~6/7
10	左京219次	7ANMTB-2 他	長岡京市神足暮角1-1	(財)長岡京市埋文	4/17~7/15
11	左京220次	7ANDKD-2	向日市森本町上町田14他	(財)向日市埋文	4/19~6/22
12	左京221次	7ANFSK-2	向日市上植野町尻引1-3	(財)向日市埋文	6/5~
13	左京222次	7ANDKD-3	向日市森本町上町田	(財)京都府埋文	6/10~
14	左京223次	7ANMSL-3	長岡京市東神足一丁目4	(財)長岡京市埋文	6/21~
15	左京224次	7ANFHM-5	向日市上植野町樋爪1-7他	(財)向日市埋文	6/18~7/20
16	右京325次	7ANNKG-3	長岡京市友岡四丁目114他	(財)長岡京市埋文	3/7~
17	右京328次	7ANFNM-4	向日市上植野町野上山25-5・28	(財)向日市埋文	5/10~
18	右京329次	7ANQSE-2	長岡京市久貝二丁目109-14他	(財)長岡京市埋文	5/10~6/5
19	右京330次	7ANIHR-4	長岡京市今里三丁目114-1・2	長岡京市教委	6/12~
20	右京331次	7ANIST-8	長岡京市今里三丁目8-4他	(財)長岡京市埋文	6/15~7/5
21	右京333次	7ANINE-6	長岡京市野添二丁目52-1他	(財)長岡京市埋文	7/18~
22	右京334次	7ANINE-7	長岡京市野添一丁目50-1他	(財)長岡京市埋文	7/20~



▽番号は一覧表・本文( )内と対応

調査地位置図

## 左京第214次(6)

(財)向日市埋蔵文化財センター

二条大路とその南北の宅地である左京三条三坊一町・同二条三坊四町および鶏冠井清水遺跡の調査である。古墳時代2・長岡京期1・中世1, 計4面の遺構面が確認された。

長岡京期の遺構は、左京二条三坊四町の南側柵、二条大路両側溝、左京三条三坊一町の掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑などがある。二条大路の路幅は約9.5m, 従来の調査結果と同じく小路幅である。三条三坊一町は、西隣りの左京第196次調査成果を合わせて、宅地の北西部のようすが判明した。北四分の一が柵に囲まれた区画となり、その中に4間×3間の掘立柱建物1棟と井戸1基が南北に並ぶ。東側は未調査。井戸からは、瓦・須恵器墨書土器・櫛・曲物・斎串・植物種子などととも、紺・緑・黄・黒色のガラス小玉数点が出土した。ガラス小玉は、長岡京では初めての発見であり、井戸の祭祀を示す資料として貴重である。

鶏冠井清水遺跡については、古墳時代の流路から土師器・須恵器・木製品・植物遺体が出土し、その下層の低湿地状堆積土から縄文土器・弥生土器・田下駄・植物遺体など、縄文後期～弥生後期の遺物が出土した。

## 左京第218次(9)

(財)向日市埋蔵文化財センター

東二坊大路と南一条大路の交差点および鶏冠井遺跡の調査であり、縄文時代～近世の遺構・遺物が発見された。

長岡京期の遺構は、東二坊大路西側溝・南一条大路南側溝および左京二条二坊十六町の北側柵・東側柵がある。すなわち十六町の北東コーナーのようすが判明した。

弥生時代前期の鶏冠井遺跡に関する遺構は、堅穴住居3棟ほか土坑・ピット・溝があり、上層では、中世の溝などが見つかっている。

出土遺物には、長岡京期の土器類・墨書土器・瓦類・金属製品(海老錠・刀子・銅鈴・銭貨)・木製品(土錘・土馬・紡錘車)・獣骨・貝・種子、縄文土器(晩期)、弥生土器(前期)・石鏃・石斧・石庖丁・銅鏃、中世の瓦器・土師器、近世陶磁器などがある。

## 左京第220次(11)

(財)向日市埋蔵文化財センター

左京第221次(12)

左京一条二坊七町および東二坊第一小路の調査である。東二坊第一小路の東側溝、七町の宅地の西側柵、宅地を区画する東西柵や掘立柱建物・柵・溝・土坑などの遺構が見つかった。出土遺物は、長岡京期の土器類・瓦・墨書土器・漆紙文書などがある。

(財)向日市埋蔵文化財センター

東二坊大路、左京三条三坊二町および鶏冠井清水遺跡の調査である。遺構面は2面あり、上面では中・近世の溝多数、下面では長岡京期の各種遺構とその下層で古墳時代の溝・流路が見つかっている。

長岡京期の遺構は、東二坊大路の東側溝、左京三条三坊二町の西側築地・宅地内側溝・掘立柱建物・土坑などがある。築地には、1か所柱間2.4mの掘立柱の門を開き、側溝に橋を架けて大路に至る。橋は、溝幅を狭めて兩岸を側板と杭で護岸し、その上に橋板を架けていたものとみられる。この門の位置は、一町の北二門と三門の境界にあたり、町内の小径を考える上で、注目すべき資料とみられる。

出土遺物には、長岡京期の土器類・墨書土器・製塩土器・瓦・銭貨・木製品(木簡・斎串・人形・剣形・箸・櫛・曲物他)・土馬・墨書人面土器・転用硯・種子、縄文晩期～古墳時代の土器、中・近世の土器・宋銭などがある。

左京第222次(13)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

左京第220次調査地の西側、東二坊第一小路を挟んだ向かい側の左京一条二坊三町の調査である。

長岡京期の遺構は、東二坊第一小路の西側溝と三町の宅地の掘立柱建物・柵・溝・土坑があり、中・近世のものには溝・土坑多数がある。長岡京期の出土遺物は、土師器・須恵器・土馬・銭貨・馬の歯・漆膜などがある。

(平良 泰久)

## センターの動向 (元.5~7)

1. できごと
5. 8 温江遺跡(加悦町)発掘調査開始
- 9 日光寺遺跡(久美浜町)・奥大石古墳群(綾部市)発掘調査開始  
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財技術者等研修「土師器・須恵器調査課程」参加(岩松調査員)
- 12 内里八丁遺跡(八幡市)試掘調査開始
- 14 調査成果交流会(於・京都文化博物館)出席(小山調査第3係長・引原主任調査員)
- 17 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 18・19 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於・近江八幡市)出席(荒木事務局長・山本次長・中谷次長)
- 19 西山館跡(福知山市)発掘調査開始
- 22 塩谷古墳群(丹波町)発掘調査開始
- 24 長岡京連絡協議会開催
- 27・28 日本考古学協会総会(於・多摩市)参加(松井主任調査員・伊野主任調査員・中川調査員)
- 31 職員研修会(講師・黄曉芬)
6. 2 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於・大阪市)出席(荒木事務局長・安田総務係長・今村主事)
- 8・9 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於・伊豆長岡町)出席(荒木局長・山本次長・杉原調査第2課長)
- 9 スクモ古墳(福知山市)発掘調査現地説明会実施
- 12 長岡京跡左京第222次(向日市)発掘調査開始
- 13 スクモ古墳発掘調査終了(4.12~)
- 14 西山館跡発掘調査終了
- 15 監事監査実施
- 17 第51回研修会開催(別掲)
- 20 都出比呂志理事, 遠所遺跡群(弥栄町)等視察
- 27 第25回役員会・理事会開催(於・平安会館)―福山敏男理事長, 荒木昭太郎常務理事, 中沢圭二・川上 貢・藤井 学・佐原 真・都出比呂志・藤田价浩・上田 将・堤圭三郎の各理事及び堂端明雄監事出席
- 28 長岡京連絡協議会開催
7. 3 長岡宮跡第228次(向日市)発掘調査開始
- 3・5 埋蔵文化財写真技術研究会(京都市)参加(田中調査員)
- 5 上野遺跡(大宮町)発掘調査開始
- 6 長良遺跡(久美浜町)発掘調査開始
- 7 日光寺遺跡・川向1号墳(久美浜町)発掘調査関係者説明会実施
- 11 川上 貢・足利健亮両理事, 上人ヶ平遺跡(木津町)視察
- 13・14 中沢圭二理事・遠所遺跡群(弥栄町)等視察
- 14 長岡京跡左京第222次発掘調査関係者説明会実施

- 17 山形古墓(久美浜町)発掘調査開始
- 18 新田遺跡(八幡市)・千代川遺跡第16次(亀岡市)発掘調査開始
- 20 川向1号墳発掘調査終了
- 21 温江遺跡発掘調査現地説明会実施
- 26 長岡京連絡協議会開催
- 28 長岡京跡左京第222次発掘調査終了
- 29 温江遺跡発掘調査終了  
遠所遺跡群発掘調査現地説明会実施

## 2. 普及啓発事業

- 5. 31 職員研修会(黄曉芬「秦漢考古と文物」)
- 6. 17 第51回研修会開催一田辺町コミュニティセンター：山城の埴輪—伊賀高弘「上人ヶ平遺跡出土の埴輪」, 近藤義行「久津川古墳群出土の埴輪について」, 川西宏幸「山城の埴輪」

受贈図書一覧 (元. 4. 16～元. 7)

苦小牧市埋蔵文化財センター	柏原4遺跡, とまこまい埋文だより No. 16
青森県埋蔵文化財センター	埋文あおもり 第8号
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	紀要Ⅳ(昭和63年度), 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第125・127～135集
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No. 44
秋田県埋蔵文化財センター	秋田県埋蔵文化財センター年報7 昭和63年度, 秋田県文化財調査報告書 第176～186集
(財)いわき市教育文化事業団	いわき市埋蔵文化財調査報告 第22・25～26冊
(財)茨城県教育財団	年報8 昭和63年度, 茨城県教育財団文化財調査報告 第47～52集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	研究紀要6, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団年報7, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第82～84・87集, 荒砥天之宮遺跡, 西今井遺跡, 埋文群馬 No. 5
(財)市原市文化財センター	(財)市原市文化財センター調査報告書 第24・27集, 市原市文作遺跡, 市原市永田・不入窯跡, 第3回 市原市文化財センター遺跡発表会要旨, 第4回 市原市文化財センター遺跡発表会要旨, 私たちの文化財 11～13
(財)長生郡市文化財センター	郷土の文化財 7～8
富山県埋蔵文化財センター	富山県埋蔵文化財センター年報 昭和63年度, 北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編 4—, 東海北陸自動車道遺跡試掘調査報告—福光町編—, 三谷遺跡・一ツ谷古墳群, 小杉流通業務団地内遺跡群第9次緊急発掘調査概要—No. 19遺跡—, 埋文とやま 第26～27号
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第34・37・42・45・50集
(財)長野県埋蔵文化財センター	長野県埋蔵文化財センター年報5(1988), (財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 3・5・10, 長野県埋蔵文化財ニュース No. 27
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	川合遺跡, 瀬名遺跡, 長崎遺跡, 坂尻遺跡, 低湿地遺跡の調査—発掘調査方法の改善研究—
浜松市埋蔵文化財事務所	浜松市山の神遺跡発掘調査報告書
(財)愛知県埋蔵文化財センター	年報 昭和63年度, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第6～9集, 埋蔵文化財愛知 No. 17
(財)滋賀県文化財保護協会	紀要 第2号, 県道高山長浜線緊急地方道整備事業に伴う東野館遺跡発掘調査報告書, 一般国道8号(長浜バイパス)関係遺跡発掘調査報告書Ⅵ-奥松戸遺跡-, 横江遺跡発掘調査報告書Ⅰ, 守山川

	中小河川改修事業に伴う大宮遺跡発掘調査報告書, 柿田遺跡発掘調査報告書, 県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ-3, 石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅰ-滋賀県住宅供給公社宅地造成事業に伴う-, 県道大津守山近江八幡線単独道路改良工事に伴う五条遺跡発掘調査報告書, 尼子南遺跡発掘調査報告書-犬上郡甲良町一, 北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書XⅠ, ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅢ-4, XVI-1~5, 錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅲ, 文化財調査出土遺物仮収納保管業務-昭和63年度発掘調査概要一, 滋賀文化財だより 133~138
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第110~111号
(財)大阪市文化財協会	章火 19~20号
(財)東大阪市文化財協会	神並遺跡第12次発掘調査概要, 東大阪市文化財協会ニュース Vol.4 No.2~3
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告 16
高槻市立埋蔵文化財調査センター	嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要 13
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所史料 第30・32冊
(財)元興寺文化財研究所	(財)元興寺文化財研究所通信 No.31
岡山県古代吉備文化財センター	所報吉備 第6号
広島県立埋蔵文化財センター	広島県立埋蔵文化財センター年報3-昭和62年度-, 備後国府跡-推定地にかかる第7次調査概報一, 明官地廃寺跡-第3次発掘調査概要一, ひろしまの遺跡 第37号
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 No.188~191
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋蔵文化財発掘調査報告書 第30集
(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	北九州市の遺跡展-古代からの招待状-
札幌市教育委員会	札幌市文化財調査報告XXXVI~VIII
米沢市教育委員会	米沢市埋蔵文化財報告書 第25集, 米沢市文化財年報 No.2
宮城県教育委員会	宮城県文化財調査報告書 第131集
いわき市教育委員会	いわき市埋蔵文化財調査報告 第19冊
吉井町教育委員会	椿谷戸遺跡発掘調査報告書, 富岡遺跡, 中ノ原遺跡
入間市教育委員会	埼玉県入間市埋蔵文化財調査報告書 第9集
坂戸市教育委員会	附島遺跡発掘調査報告書Ⅰ~Ⅲ, 坂戸市遺跡発掘調査報告書 第1集, 勝呂廃寺・勝呂廃寺F地区(西入間警察署勝呂駐在所)発掘調査報告書, 坂戸市遺跡発掘調査概報Ⅰ~Ⅱ

千葉市教育委員会	昭和63年度 千葉市内遺跡群発掘調査報告書
市原市教育委員会	昭和63年度 市原市内遺跡群発掘調査報告
小見川町教育委員会	小見川町内遺跡群発掘調査報告書
袖ヶ浦町教育委員会	昭和63年度 袖ヶ浦町内遺跡群発掘調査報告書
東金市教育委員会	昭和63年度 東金市内遺跡群発掘調査報告書—小野遺跡—
狛江市教育委員会	狛江の遺跡, 狛江市文化財調査報告書 第9集
神奈川県教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告 31, 神奈川県文化財調査報告書 第48集
鎌倉市教育委員会	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5, 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書—昭和63年度—
富山市教育委員会	昭和63年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要, 富山県総合運動公園内遺跡試掘調査報告書
福野町教育委員会	富山県福野町寺家新屋敷館跡 II
加賀市教育委員会	加賀市埋蔵文化財調査報告書 第19集
小松市教育委員会	市内遺跡詳細分布調査報告書II—昭和63年度—, ニツ梨横川1号窯, 後山無常堂古墳・後山明神3号墳発掘調査報告書
小浜市教育委員会	後瀬山城(若狭武田氏居城の調査)
敦賀市教育委員会	敦賀市埋蔵文化財調査概報—1
三方町教育委員会	三方町文化財調査報告書 第8集
八代町教育委員会	八代町埋蔵文化財調査報告書 第6集
岡谷市教育委員会	榎垣外・志平・清水田遺跡発掘調査報告書
塩尻市教育委員会	吉田向井遺跡, 三獄西遺跡, 五輪堂遺跡, 吉田向井・千本原—昭和63年度県単高速道関連道路改良工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—
松本市教育委員会	松本市文化財調査報告 No. 67・69~73・75~79・81, 史跡松本城北外堀外側土塁発掘調査報告書, 史跡松本城黒門枳形内発掘調査報告書, 三間沢川砂岸遺跡(I), 坪の内・向畑・南中島遺跡
多治見市教育委員会	小名田西ヶ洞2号・3号窯発掘調査報告書, 小名田古窯跡群発掘調査報告書, 小名田西山1号窯発掘調査報告書, 多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書 第17~20号
古川町教育委員会	上町遺跡C地点発掘調査報告書
新居町教育委員会	大谷遺跡・八反田遺跡確認調査報告書, 城ノ前遺跡発掘調査報告書, 特別史跡新居関跡発掘調査概要
沼津市教育委員会	沼津市埋蔵文化財発掘調査報告書 第43~46集
愛知県教育委員会	愛知県埋蔵文化財情報 4
名古屋市教育委員会	文化財叢書 第89号(昭和・天白区の考古遺跡)
稲沢市教育委員会	土田関連発掘調査概要報告書, 尾張大國霊神社境内緊急発掘調査報告書, 稲沢市文化財調査報告 XXXIII~IV

吉良町教育委員会	播豆郡吉良町中根山遺跡発掘調査報告書
瀬戸市教育委員会	昭和62年度 瀬戸市埋蔵文化財年報
長久手町教育委員会	長久手町史 資料編七(近世)
一志町教育委員会	一志町埋蔵文化財調査報告書 13
大津市教育委員会	大津市埋蔵文化財調査報告書 15
信楽町教育委員会	信楽町文化財報告書 第3集
山東町教育委員会	山東町埋蔵文化財報告書 Ⅲ～Ⅴ
彦根市教育委員会	彦根市埋蔵文化財調査報告 第15～16集
彦根市	特別史跡「彦根城跡」大手山道石垣保存修理工事報告書
米原町教育委員会	米原町埋蔵文化財調査報告 XI～XIII
野洲町教育委員会	1986年度 野洲町埋蔵文化財調査年報, 昭和63年 野洲町遺跡発掘調査概要
八日市市教育委員会	八日市市文化財調査報告 9
大阪府教育委員会	法蓮坂遺跡発掘調査概要, 畑遺跡発掘調査概要, 南河内遺跡群発掘調査概要・Ⅰ, 高屋城跡(城山遺跡)発掘調査概要, 農免道路河南中地区建設に伴う神山遺跡発掘調査概要・Ⅰ, 八尾南遺跡発掘調査概要(流域下水道飛行場南幹線管渠付設に伴う調査), 大津道遺跡発掘調査概要・Ⅱ—松原市南新町所在一, ハケ岡遺跡発掘調査概要・Ⅰ, 池尻城跡発掘調査概要・Ⅱ, 南花田遺跡発掘調査概要・Ⅲ, 池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ—八尾市福万寺所在一, 石川左岸幹線管渠築造遺跡群発掘調査概要・Ⅲ, 大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅳ～Ⅴ, 大水川改修に伴う発掘調査概要・Ⅴ, 府道宿野下田線歩道設置工事に伴う大里遺跡発掘調査概要・Ⅴ, 神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅳ, 淡輪遺跡発掘調査概要・Ⅸ, 河南西部地区農地開発事業に伴う寛弘寺遺跡発掘調査概要・Ⅶ, 昭和61年度 堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告書・Ⅱ, 昭和62年度 田尻遺跡・船岡山発掘調査概要, 東門寺跡・小垣外遺跡発掘調査概要報告書・Ⅲ, 喜志西遺跡発掘調査概報, ツゲノ遺跡発掘調査概要・Ⅱ
和泉市教育委員会	府中遺跡発掘調査概要・Ⅸ
貝塚市教育委員会	貝塚市埋蔵文化財調査報告 第18集
吹田市教育委員会	吉志部瓦窯跡(府営岸辺住宅建替に伴う発掘調査報告書), 昭和63年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報, 吹田市文化財ニュース No. 10
大東市教育委員会	大東市埋蔵文化財調査報告 第3～4集
豊中市教育委員会	豊中市文化財調査報告書 第27集
東大阪市教育委員会	東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要 30
枚方市教育委員会	旧枚方の町屋と町並

藤井寺市教育委員会

美原町教育委員会

八尾市教育委員会

芦屋市教育委員会

伊丹市教育委員会

一宮町教育委員会

加東郡教育委員会

篠山町教育委員会

西紀、丹南町教育委員会

太子町教育委員会

宝塚市教育委員会

香芝町教育委員会

天理市教育委員会

榛原町教育委員会

山添村教育委員会

和歌山市教育委員会

御坊市教育委員会

橋本市教育委員会

鳥取市教育委員会

倉吉市教育委員会

岡山県教育委員会

倉敷市教育委員会

玉野市教育委員会

宗像市教育委員会

大分県教育委員会

朝地町教育委員会

宮崎県教育委員会

藤井寺市文化財保護事業年報—昭和57・58・59年度—, 石川流域  
遺跡群発掘調査報告 III

黒姫山古墳発掘調査概要

八尾市文化財調査報告 19~20, 八尾市文化財紀要 4

芦屋市文化財調査報告 第17集

有岡城跡発掘調査報告書 VI

生栖遺跡 I—ほ場整備事業に伴う調査—

加東郡埋蔵文化財報告 8

篠山町文化財資料 第10集

丹波国大山荘現況調査報告 V

播磨国鷗荘現況調査報告 II

宝塚市文化財調査報告 第25集

かしばの文化財 I, 瓦口森田遺跡発掘調査概報, 藤ノ木丁遺跡  
発掘調査概報, 田尻峠—中和幹線建設事業にともなう発掘調査概  
報—, 昭和63年度 鶴峯荘第3地点遺跡発掘調査概報

樺本高塚遺跡発掘調査報告書

榛原町文化財調査報告書 第3~4集

大川遺跡—縄文時代早期遺跡の発掘調査報告書—

木ノ本釜山(木ノ本Ⅲ)遺跡発掘調査報告

昭和61年度 御坊市内遺跡発掘調査概報, 昭和62年度 御坊市内遺  
跡発掘調査概報, 広域営農団地農道整備事業に伴う岩内古墳群埋  
蔵文化財発掘調査概報, 広域営農団地農道整備事業に伴う岩内古  
墳群他埋蔵文化財発掘調査概報 II, 小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)  
発掘調査概要 VI, 埋蔵文化財調査報告 第2~3集, 御坊駅前広  
場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

昭和63年度 橋本市内遺跡調査概報

鳥取市文化財報告書 23・25, 広岡古墳群分布調査概報, 広岡古  
墳群発掘調査報告書

倉吉市文化財調査報告書 第53~58集

岡山県埋蔵文化財報告 19

倉敷市文化財だより 第5号

岡山県玉野市滝・鐘鉦場1号墳

宗像市文化財調査報告書 第13~17・20~21集

笠松・尾畑遺跡, 大山遺跡・大根川遺跡, 中津バイパス埋蔵文化  
財発掘調査報告書 I, 植田市遺跡 I, 九州横断自動車道建設に  
伴う発掘調査概報(日田地区) V

朝地地区遺跡群発掘調査概報 IV

宮崎県文化財調査報告書 第32集, 西ノ原遺跡(大淀1号墳), 国

宮崎市教育委員会	衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書 I, 車坂・山下遺跡, 昭和63年度 農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概要報告書
川南町教育委員会	蓮ヶ池横穴群保存整備事業概報 II
串間市教育委員会	川南町文化財調査報告 4
津屋崎町教育委員会	串間市文化財調査報告書 第2集 津屋崎町文化財調査報告書 第6集
秋田県立博物館	秋田県立博物館研究報告 第14号, 博物館ニュース No.75~76
東北歴史資料館	東北歴史資料館研究紀要 第13巻
土浦市立博物館	土浦市立博物館紀要 第1号
栃木県立博物館	栃木県立博物館研究紀要 第6号
群馬県立歴史博物館	群馬県立歴史博物館年報 第9号
埼玉県立歴史資料館	研究紀要 第11号
国立歴史民俗博物館	歴博 第34~35号
千葉県立房総のむら	印旛郡米町五丹歩遺跡
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘年報 12
千葉市立加曾利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第16号
流山市立博物館	流山市立博物館調査研究報告書—流山の職人—
成田山霊光館	なりた No.45
大田区立郷土博物館	写真が語る東京湾—消えた干潟とその漁業—, 大田区立郷土博物館だより 第20号, 博物館ノート No.43~48
世田谷区立郷土資料館	世田谷区史料叢書 第四巻
調布市郷土博物館	調布市郷土博物館だより No.31
小田原市郷土文化館	小田原市郷土文化館研究報告 No.25
長岡市立科学博物館	長岡市立科学博物館研究報告 第24号
富山市考古資料館	富山市考古資料館紀要 第8号, 富山市考古資料館報 No.18~19
石川県立歴史博物館	石川県立歴史博物館年報 第1号, 小袖の系譜と意匠, 石川れきはく 第10~11号
小松市立博物館	小松市立博物館だより 第41号
福井県立朝倉氏遺跡資料館	朝倉氏遺跡資料館紀要 1988, 特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡 XX
山梨県立考古博物館	山梨県立考古博物館だより No.18
茅野市尖石考古館	山寺遺跡—国道209号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—
浜松市博物館	浜松市博物館だより No.26
沼津市歴史民俗資料館	沼津市博物館紀要 13, 設立15周年記念特別展 沼津藩とその周辺, 沼津市歴史民俗資料館資料集 7, 資料館だより 85
名古屋市博物館	研究紀要 第12巻

名古屋市見晴台考古資料館	<p>堅三蔵通遺跡—第7次調査の概要—, 白鳥古墳第II次発掘調査報告書, 高蔵遺跡第3次発掘調査報告書, 神ノ倉東部土地区画整理内古窯跡発掘調査報告書, 特別展「城と町のデザイン 戦国～江戸の考古学」, 見晴台教室 '88</p>
豊田市郷土資料館	<p>豊田市文化財叢書 16</p>
蒲郡市博物館	<p>東京・町田市立国際版画美術館所蔵 近現代の版画, 特別展 岡本銈吾コレクション, 企画展 回想常磐館</p>
斎宮歴史博物館	<p>三重県斎宮跡調査事務所年報 1988</p>
高島町歴史民俗資料館	<p>高島の民俗 第63～64号</p>
水口町立歴史民俗資料館	<p>水口町立歴史民俗資料館収藏品目録 第1集</p>
大阪府立泉北考古資料館	<p>泉北考古資料館だより No. 39</p>
大阪市立博物館	<p>研究紀要 第21冊, 大阪市立博物館報 No. 28</p>
兵庫県立歴史博物館	<p>兵庫県立歴史博物館紀要 塵界(創刊号), 中国 唐・長安の文物, けんとうしものがたり, 兵庫県立歴史博物館ニュース No. 26～27</p>
神戸市立博物館	<p>神戸市立博物館研究紀要 第5号, 神戸市立博物館年報 No. 5, 神戸市立博物館館蔵品目録 美術の部 5, 同地図の部 5, 同考古・歴史の部 5, 博物館だより No. 28</p>
西宮市立郷土資料館	<p>西宮市立郷土資料館報 昭和63年度</p>
豊岡市立郷土資料館	<p>本井墳墓群・尼城址, 鎌倉・若宮古墳群, 豊岡市埋蔵文化財分布地図および地名表</p>
島根県立八雲立つ風土記の丘	<p>八雲立つ風土記の丘 No. 96</p>
出雲玉作資料館	<p>玉作資料館ニュース 第10～11号</p>
津山郷土博物館	<p>常設展示図録 美作の歴史と文化, 博物館だより No. 1</p>
(財)日本はきもの博物館	<p>日本はきもの博物館だより 34</p>
徳島県博物館	<p>徳島県博物館紀要 第20集</p>
瀬戸内海歴史民俗資料館	<p>瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第4号</p>
北九州市立考古博物館	<p>五世紀の北九州—“倭の五王”時代の国際交流—</p>
佐賀県立九州陶磁文化館	<p>肥前地区古窯跡調査報告書 第6集, セラミック九州 No. 19</p>
長崎県立美術博物館	<p>長崎県立美術博物館だより No. 101～102</p>
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	<p>大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No. 18～19</p>
筑波大学歴史・人類学系	<p>歴史人類 第17号</p>
東京大学文学部考古学研究室	<p>東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第7号</p>
東京大学総合研究資料館	<p>東京大学総合研究資料館ニュース 16号</p>
國學院大學文学部考古学研究室	<p>國學院大學文学部考古学実習報告 第17～18号</p>
東洋大学文学部史学科研究室	<p>東洋大学文学部紀要 第42集, 白山史学 第25号</p>
日本大学史学会	<p>史叢 第42号</p>

立教大学学芸員課程研究室  
早稲田大学考古学会  
早稲田大学所沢校地埋蔵文化財  
調査室  
富山大学人文学部考古学研究室  
  
金沢大学文学部考古学研究室  
金沢大学遺跡調査委員会  
名古屋大学文学部考古学研究室  
  
三重大学歴史研究会  
関西大学  
神戸女子大学史学会  
岡山大学文学部  
広島大学総合移転地埋蔵文化財  
調査委員会  
愛媛大学埋蔵文化財調査室  
愛媛大学法文学部考古学研究室  
九州大学九州文学史研究施設  
熊本大学文学部考古学研究室  
  
北網圏北見文化センター  
大宮市遺跡調査会  
  
山武考古学研究所  
  
板橋区四葉地区遺跡発掘調査会  
府中病院内遺跡調査会  
(財)多摩市文化振興財団  
日本考古学協会  
宮内庁書陵部  
国立国会図書館  
読売新聞社  
(株)講談社  
小学館  
(株)名著出版

MOUSEION 34  
古代 第87号  
早大所沢文化財調査室月報 No. 33~50  
  
立山町文化財調査報告書 第2~3・5~6・8~9冊, 野沢狐  
幅遺跡緊急発掘調査概報, 野沢狐幅遺跡緊急発掘調査概要 I,  
立山町の石造物 第1集  
金沢考古 第16号  
角間一金沢大学総合移転用地内埋蔵文化財調査報告一  
名古屋大学文学部研究論集 104, 考古資料ソフテックス写真集  
第4集  
ふびと 第44号  
祇園精舎  
神女大史学 第6号  
岡山大学文学部研究叢書 2  
広島大学総合移転地埋蔵文化財発掘調査年報 VII  
  
鷹子・樽味遺跡の調査  
三間高校校庭遺跡の調査  
九州文化史研究所紀要 第34号  
塔原遺跡  
  
川東1遺跡  
大宮市遺跡調査会報告 第24~27集, 大宮市遺跡調査会報告別冊  
5  
山武考古学研究所年報 No. 5~7, 宮平遺跡調査概報, 佐久間遺  
跡発掘調査報告書, 下総町成井鶴ヶ峰遺跡発掘調査報告書, 常陸  
国分僧寺跡発掘調査報告書  
板橋区四葉地区遺跡発掘調査報告 II, 野川遺跡  
武蔵国分寺跡出土の漆紙文書—武蔵台遺跡—  
バルテノン多摩ミュージアムライブラリー(縄文時代と現代)  
日本考古学年報 40  
書陵部紀要 第40号, 出土品展示図録 埴輪 I  
日本全国書誌 No. 1691  
ヨミウリススペシャル 31—吉野ヶ里・藤ノ木・邪馬台国—  
古代史復元 6(古墳時代の王と民衆)  
縄文式土器大観 I  
歴史手帖 第185~190号

平塚市遺跡調査会	平塚市埋蔵文化財シリーズ 第11～13集, 平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書 2, 平塚市埋蔵文化財調査報告書 第6集
富山市日本海文化研究所	富山市日本海文化研究所紀要 第1・2号, 富山市日本海文化研究所報 第2号
(財)山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所報 第7号
(財)古代学協会	古代文化 第361～366号
(財)冷泉家時雨亭文庫	志くれてい 第28～29号
古代を考える会	古代を考える 50
奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部	飛鳥・藤原宮発掘調査概報 19
朝鮮学会	朝鮮学報 第129～130輯
濱田耕作先生著作集刊行委員会	濱田耕作著作集 第2巻
(財)向日市埋蔵文化財センター	向日市埋蔵文化財調査報告書 第25集
京都市埋蔵文化財調査センター	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度, 平安京跡発掘調査概報 昭和63年度, 鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和63年度, 長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報 昭和63年度
京都府教育委員会	重要文化財萬福寺天王殿修理工事報告書, 重要文化財萬福寺齋堂修理工事報告書, 重要文化財旧日本銀行京都支店修理工事報告書, 京都府遺跡地図 第4分冊, 埋蔵文化財発掘調査概報 1989, 京都の文化財 第7集
丹後町教育委員会	京都府丹後町文化財発掘調査報告書 第4集
野田川町教育委員会	京都府野田川町文化財発掘調査報告 第5集
加悦町教育委員会	国指定史跡蛭子山古墳Ⅱ発掘調査概要
宮津市教育委員会	宮津市の指定文化財 第3～4集, 宮津市文化財調査報告 第14・17集
福知山市教育委員会	福知山市文化財調査報告書 第14～15集
亀岡市教育委員会	亀岡市文化財調査報告書 第21～22集
大山崎町教育委員会	大山崎町遺跡地図
宇治市教育委員会	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第12～13集, 市民考古学講座 第1講～第3講
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第19集
田辺町教育委員会	田辺町埋蔵文化財調査報告書 第10集
加茂町	加茂町史編さん資料調査報告書資料研究(創刊号)
木津町教育委員会	木津町埋蔵文化財調査報告書 第7集
京都府立丹後郷土資料館	弥栄ニゴレ古墳とその周辺(特別陳列図録 24), 修験僧智海とその時代—15世紀の丹後—
京都府立山城郷土資料館	山城郷土資料館報 第6号, 南山城山村民俗文化財調査報告書 山

京都府立総合資料館

(財)京都府文化財保護協会

京都市文化観光局文化財保護課

京都市歴史資料館

亀岡市文化資料館

宇治市歴史資料館

京都大学埋蔵文化財研究セン

ター

綾部史談会

精華町の自然と歴史を学ぶ会

岡 田 登

小 市 喬

都 出 比呂志

中 谷 雅 治

樋 口 隆 康

廣 田 長三郎

遊 佐 和 敏

吉 岡 康 暢

村のくらし II

資料館紀要 第17号, 京都府史料目録追録 No.5, 第6回 東寺百  
合文書—応仁の乱—, 総合資料館だより No.80

文化財報 No.65

京都市文化財だより 第11号

京都市歴史資料館紀要 第5・6号

第7回企画展示図録「米・豊かな実りを求めて」—大むかしの農  
具—

企画展 上林清泉

京都大学校内遺跡調査研究年報 1986年度

綾部藩・山家藩社寺要記

波布理曾能 第6号

皇學館大學史料編纂所報 第97~99号

史迹と美術(復刻版) 第5輯

日本農耕社会の成立過程

邪馬台国が見えた! 吉野ヶ里王国

弥生の使者徐福—稲作渡来と有明のみち—

古瓦図考

帆立貝式古墳

東日本における中世窯業の基礎的研究

—編集後記—

9月になり、朝晩がようやく涼しくなりましたが、情報33号が完成しましたのでお届けします。

本号は、当調査研究センターの実施したヌクモ古墳群、長岡京跡右京第310次調査だけでなく、八幡市教育委員会が調査されたヒル塚古墳の概要も掲載することができました。また、資料紹介として3本の投稿があり、バラエティーに富んでいます。その他、日頃の研究成果として、集落遺構に伴う不整円形土坑群についての論考が投稿され、本号は充実した内容になりました。よろしく、御味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

**京都府埋蔵文化財情報 第33号**

平成元年9月26日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
☎ (075)441-3155 (代)